

# 劉長生の生涯と教説

蜂屋邦夫

はじめに

金朝治下の華北において王重陽<sup>(1)</sup>（一一二二～一二七〇）によって創唱された全真教は、重陽の亡きあと、主として四哲と称される四人の直弟子によって継承されて命脈を保った。筆者は、すでに四哲のうちの馬丹陽（一二三三～一二八三）と譚長真<sup>(3)</sup>（一二二三～一二八五）について概略ながら考察した。本稿は、それらを踏まえながら、劉長生（一二四七～一二〇三）の事跡と教説を考察するものである。四哲のうちの残る一人、丘長春（一二四八～一二二七）については、別の機会に検討したい。

四哲のうち、馬丹陽は、事実上の二代目教主として重責を担い、事跡についても、また残した詩詞などについても、見るべきものが多い。最年少の丘長春は、チングスハンに謁見して布教の保証を得、元代における全真教大発展の基礎を築いた人物として、歴史上にも全真教史上にも重要である。この二人にくらべると譚長真、劉長生は影が薄い。

しかしながら、重陽仙去後の十二世紀の全真教は、重陽が山東に残してきた郝広寧（一二四〇～一二二二）、王玉陽（一二四二～一二二七）、孫不二（一二一九～一二八二）らを含めて、重陽のごく少数の直弟子が継承発展させたのであり、一人ひとりの活動が重い意味をもっていた。それゆえ、初期全真教の活動状況を解明するためには、これらの直弟子の事跡を究明することがきわめて重要である。

本稿で使用したおもな資料は、つぎのようである。「」内は、本稿での略称である。

- 1 『無為清静長生真人至真語録』藏六冊。一二〇二年正月十五日付、虚白道人・韓士倩・彦広の序がついている。
- 2 『仙槩集』藏六冊。このうち、詞については、唐圭璋編『全金元詞』、一九七九年十月、中華書局、参照。
- 3 『黄帝陰符経註』藏七冊。一一九一年二月十六日付、寧海州学正・范懌・徳裕の序がついている。
- 4 『黄庭内景玉経註』藏八冊。
- 5 『甘水仙源録』李道謙撰。藏六冊。一二八八年の序がある。卷二に、秦志安撰「長生真人劉宗師道行碑」〔道行碑〕が収められている。これについて、陳垣編纂『道家金石略』、一九八八年六月、文物出版社、参照。
- 6 『金蓮正宗記』林間羽客樗櫟道人（秦志安）編。藏八冊。辛丑の年（一二四一年とされる）の序がある。本稿では卷四「長生劉真人」伝を指す「金蓮」。内容は前項「道行碑」とほぼおなじである。

- 7 『七真年譜』李道謙撰。藏八冊。一二七一年の序がある〔年譜〕。

- 8 『金蓮正宗仙源像伝』劉天素・謝西蟾合撰。藏八冊。一三三六年および一三三七年の序がある。本稿では「長生子」伝を指す「像伝」。

## 一 劉長生の生涯

### (一) 重陽による教導

劉長生は金の皇統七年（一二四七）七月十二日、山東省の東萊、武官莊に誕生した。その先祖は九世にわたって「孝友」があいつぎ、北宋の太平興國年間（九七六～八四）には朝廷から顕彰されて租税諸役を免除された（金蓮、統編）。劉家の当主たちは、親戚や知人、貧民に恩恵を施し（統編）、当地の「右族」となっていたらしい。祖父や父親もその風を受けつぎ、陰徳を好んで貧民を救済したほか、良田八十余頃を龍興寺に寄進するという「種福」の行為をした（金蓮）。長生は、そうした宗教的雰囲気をもった家に生まれたのである。

父親は長生が幼いうちに死亡したらしい。長生は母に孝養をつくした（統編）。世俗的なことには関心がなかったようで、官に就かず、結婚もしないと心に決め（金蓮）、しばしば出家を希望したらしいが、母親が許さなかった（像伝）。武官の南二里ばかりのところには太基山があり、山の南には道士谷があつて、そのむかし北魏の鄭道昭が修道した地として有名であるが、長生はそこに「盤桓」し、「道」を学ぼうとした（統編）。詳細は分らないが、要するにごく若いころから道教に関心があつたということであろう。

二十歳のとき、母から結婚ばなしをもちかけられたが、長生は「道」を学ぶ気持が強く、辞つた（統編）。大定九年（一二一九）二月のこと、長生は隣家の壁上の、人の手が届かない場所に墨痕あざやかに二首の頌が書かれているのを

見つけた。その末句に「武官は性を養う真仙の地、須らく長生不死の人<sup>有</sup>る（『統編』では、作る<sup>※</sup>）べし」とあり、長生はひどく心を動かされたいが、出家を決心するには至らなかつた（金蓮、像伝）。

その年の九月、重陽は登州福山県に三光会、蓬萊に玉花会を立てたのち、丹陽、長真、長春を率いて萊州にやつてきた（年譜）。長生はその噂を聞くや大急ぎで重陽のもとに出かけたが（金蓮）、もともと隠棲の志のあつた母親も同行して参謁した（統編）。萊州在住の多くの人が重陽のもとに出かけたが、弟子として容れられたのは長生だけである（『甘水仙源録』巻一「全真教祖碑」）。長生が拝謁すると、重陽は笑つて「お前は壁の墨痕の意味が分かつたか」といい、三弟子も顔を見あわせて笑つた。長生は、そこではじめて頌が自分を啓発する「神通の変現」であつたと悟り（金蓮）、心から弟子入りを希望した（像伝）のであるが、長生が頌を見つけた二月には重陽は文登県の姜実の庵で教団の基礎固めをしていたところで、「神通の変現」はむしろ萊州に来てからの情報収集の結果であらう。母親も長生の出家を喜んで認め（『統編』重陽伝）、こうして四哲が揃つたのである。

重陽は長生の「神采」を見て、「松の月や竹の雪は、もとより黄塵を受けないものだ」と感嘆し、詩を贈り、名を処玄、字を通妙、号を長生子とした。号は壁頌の語を採つたのである（金蓮）。このときの贈詩は『金蓮』や『統編』に記されているが、また『重陽全真集』（藏<sup>五</sup>五冊）巻十にも収録されている。字句に若干の相違があり、いま『全真集』の詩を記せば、つぎのようである。「釣り罷<sup>お</sup>りて將に帰らんとして又た<sup>※</sup>籬を見、亦た<sup>※</sup>仙曹に列せらる分有るを知る、鳴榔相喚び予の意を知り、洪波を躍出す万丈の高」と。道にむかう心が響き合つた高揚した気分を表わしたものであらう。ときに長生は二十三歳、重陽は五十八、丹陽、長真は四十七、長春は二十二歳であつた。

十月に掖県に平等会を立てたあと、重陽は四弟子をつれて西にむかい、開封の夷門の近く、岳台坊の磁器王氏の旅

館に投宿した。<sup>(4)</sup> 開封での生活については、『像伝』、『統編』には記事がなく、わずかに『金蓮』に「乞食鍊形し、姓を隠し名を埋め、朝に叩ね暮に請う。(重陽は)行坐に薫え蒸き、委曲に玄機を挑し幹せ、丁寧に丹経を啓え迪う。或雲を掃い、迷水を泮す(乞食鍊形、隱姓埋名、朝叩暮請、行薫坐蒸、委曲而挑幹玄機、丁寧而啓迪丹経、掃或雲、泮迷水)」と抽象的な説明があるだけである。『年譜』によれば十月中に平等会を立て、開封に到着したと思われるから、到着は早くても中旬、おそらくは下旬になってからであろう。重陽は翌年のはじめに仙去しているので、開封での四哲の教導はせいぜい二ヵ月ほどである。この時期の教導は苛烈を極めたが、その鋒先はおもに丹陽にむけられた<sup>(5)</sup>。死期を悟った重陽は、自分の全精力、全能力をあげて丹陽を鍛鍊したのであろう。入信したての長生がどこまで重陽の教化を吸収できたかは疑問である。

『統編』重陽伝によれば、鍛鍊は十二月にもっとも嚴格を極め、重陽は丹陽らに托鉢させた錢物で薪炭をたくさん買わせ、部屋で盛大に燃させた。部屋は小さいので丹陽と長真だけをいれ、長生と長春は外に立たせた。寒さに耐えかねて長生はとうとう逃げてしまった。重陽はそこで三弟子をベッド脇に立たせ、長春は丹陽に、長生は長真に託する旨を告げ、長春について「この子は、いつか高い地位につき、きつと大いに教門を開くだろう」と言った、とある。遺言については、『年譜』は重陽仙去の時期のこととしているが、いづれにせよ、この時点での長生と長春の修行の深淺の違いと、重陽が長春に大きな期待を寄せていたことが鮮やかに描き出されている。ただ、『金蓮』長春伝などによれば、長春が後日大いに教門を発展させるであらうと予言したのは丹陽であり、長春が死を目前にしてそのことを述懐する箇所はすこぶるリアルである。長春は重陽に言及しておらず、予言の件は長春の事跡を知悉する『統編』重陽伝作者の創作であらう。

(二) 陝西、河南での修行

大定十年(一二七〇)正月四日、重陽は開封で客死した。丹陽は長真、長生、長春を率いて入関し、劉蔣の祖庵で墓所を修治した。十二年(一二七二)、長安で托鉢したのち、長真らをつれて開封に至り、重陽の仙柩を劉蔣に持ちかえた。以後、四哲は劉蔣で重陽の喪に服し、十四年(一二七四)八月、喪があげると鄆県の秦渡鎮にある真武廟に出かけた。その夜、四人はそれぞれの志を語りあい、長生は「闘志」を目標とした(年譜)。寒さに耐えかねて病床の重陽のもとを逃げだしてしまった長生にふさわしい目標というべきであろう。

祖庵での生活については、ほとんど分からない。後年、「四友 墳を守り、曾て上清に近し。同居すること五載、雲水閑行す」(『仙樂集』卷三・十一表、四言頌)と述べているが、抽象的である。ただ、道士としての薰陶は、この間に丹陽から受けたことであろう。長生にとって、わずか二ヵ月余の重陽の教化より、丹陽から受けた指導のほうがはるかに大きな影響があったにちがいない。仙去して蓬萊で師父に会おうという主旨の表現は道士の詩詞にみえる定型的なものであるが、長生の場合、師父の位置におかれるのは重陽よりも丹陽のほうがずっと多い。

四哲の名を列挙する詩詞は丹陽の作品などに散見し、また四哲の伝記資料に常見するものであるが、これについても長生の詩詞には、つぎの五言絶句の頌が四例あるばかりである。

丘劉譚馬敬、忘形修性命、清志有始終、寸尽万愆病。

丘劉譚馬善、降火明修鍊、結就汞和鉛、勸人依教典。

丘劉譚馬悟、別有祖師度、忘世洞天遊、雲霞為伴侶。

丘劉譚馬寔、了道蛻凡殼、昇入太無中、亘靈居杳邈。(『仙樂集』卷二・十五表裏)

内容は四哲が重陽の教えを受けて性命を修鍊し、仙道を体得したというだけであって、とくに深い内容はない。これに相当する作品が丹陽の『漸悟集』巻下・四仙韻（減字木蘭花）に収録されている。

丘劉譚馬、幸いに風仙に遇い親しく教化さる。山東に一別し、秦川に雲水して興窮まらず。清貧にして快樂、自在に逍遙して做作するなし。清浄の門庭に、家風を闡出して聖經に合う。<sup>(6)</sup>（三十一表）

長生の頌にくらべて情況の総括に一日の長がある。この詞は、喪があけて秦渡鎮で志を語りあつたころの作品と思われ、それゆえ右のような総括に続いて、さらにつきのような詞がみえる。

丘仙通密、跡を磻溪に隠して人識らず。通妙劉仙、永く終南に住んで万縁を屏<sup>す</sup>つ。譚仙通正、志は清貧にして大定を修するに在り。三髻の山侗、環牆に処<sup>ま</sup>りて也た放慵を願<sup>う</sup>。<sup>(7)</sup>（三十一裏）

譚仙通正、長真を悟徹して玉性を修む。馬鈺山侗、豁豁洋洋として害風に似たり。劉仙通妙、長生を把握して真に<sup>了</sup>了。通密丘仙、長春不夜の天を修養<sup>す</sup>。<sup>(8)</sup>（三十二表）

処端通正、道号は長真にして真に上認。自在に逍遙し、岩前に水を汲む瓢を撼碎す。処玄通妙、道号は長生にして真に<sup>了</sup>了。慎んで先に帰るなかれ、且く長春丘処機に<sup>とまな</sup>伴え。<sup>(9)</sup>（三十二表）

第三首の譚長真については意味不詳である。正と認は押韻せず、字のまちがあるかもしれない。長生について、第一首の「永住終南屏万縁」と第三首の「慎勿先帰、且伴長春丘処機」は、諸伝記資料の記事に適合しない。この詞が作られた状況から見れば「永住」云々は丘処機の「隠跡磻溪」とおなじように今後の行動のように思われるから、丹陽は長生がひきつづき終南で修行することを希望したということになる。さもないければ長春と行動をとみにさせようとしたのであろう。おそらく丹陽は長生の修行程度に一抹の危惧を懷いていたのではなからうか。「先帰」が萊

州に帰ることだとすれば、長生の氣持に迷いがあつたようにも受けとれる。長生が目標とした「闢志」とは、そうした種々の事情を込めたものだと思しうが、詳細は不明である。

この前後の長生の修行状況を示す話として、王元暉『太上老君說常清靜經注』（藏三冊）に、つぎのようなことがみえる。むかし馬丹陽が終南山に隠棲していたころ、ある日、劉処玄がやって来て庵の壁の外から拝をした。丹陽は処玄の心がまだ「灰」になつていないのを知っていたから、壁を隔てて、「河南府に行つて劉仙姑に参じなさい。三年後に帰つて来なさい」と言つた。そこで処玄はすぐさまでかけた。仙姑はあらかじめ処玄が来ることを知つていて、盛粧して迎えた。処玄は一目みて心が動いた。すると仙姑が言うに「わざとあなたを試してみたのです。その心さえ除いてしまえば、あなたの修行はすぐに完成するでしょう」と戒めた。処玄はすぐに後悔し、洛陽の盛り場に行つて打坐した。乞食して飯をたべ、三年たつて心が灰になり、得るところがあつたように思つて、そこで丹陽に再見した。丹陽はこれを見て「よし」と言い、道を授けた。いまの全真教の長生劉真人がその人である、と（八表）。

この話は事実ではないが、長生の事実上の師が丹陽であつたことと、わざわざ洛陽の盛り場で打坐した長生の覚悟の一端は正しく伝えているように思われる。

ともあれ、長生は、さきにみた詞に示される丹陽の意向には従わず、洛陽にむかつた。譚長真に同行したのである。長真は朝元宮に止住し、長生は土地廟に居を定めた（年譜、続編）。ときに長生は二十八歳であつた。長真は翌年には北方の行脚に出たが、長生は洛陽にとどまつて修行を積んだ。その状況について、『続編』には「語らざること三年」、『像伝』には「心は灰にして益寒く、形は木にして春ならず。人餓れば則ち食べ、人問えば則ち答う」と簡単に記しているだけであるが、「道行碑」には、つぎのようにやや詳しく記載されている。



先生、独り跡を洛京に通る。性を塵埃混合の中に鍊り、素を市鄽雜沓の叢に養う。管絃はその和を滑すに足らず、花柳はその精を撓すに足らず。心は灰にしてこれがために益寒く、形は木にしてこれがために春ならず。人饌れば則ち食べ、饋らざれば則ち殊に慍容なし。人間えば則ちこれに對するに手を以てし、問わざれば終日純純たり。力を定むること円満にして、天光發明す。

祖庭での生活では丹陽の指導があり、兄弟弟子の他にも同志の者たちが漸次増えていったのであるから、洛陽での生活が長生のはじめての独力による修行であった。乞食の生活と無言の行に励んでいたさまがわかる。「定力」の「定」は定観、定意、定境などの「定」で、清浄の状態に入ることを表わすものであろう。「天光」とは、いわゆる元神や元氣のことで、本来の真性ともいふべきものであろう。ただ、「定力」にせよ「天光」にせよ重陽や丹陽の用語にはない。

長生自身がこのことを詠んだ詩詞はほとんどない。長生の作品は、おしなべて平凡で單調なくしかえしが多く、しかも五言絶句頌を百六十首（『仙樂』巻二）や百八十九首（同・巻五）も並べた執拗な調子に特色がある。無言の行を三年もつづけた精神に通ずるところがあろう。また、詞書もあまりないので具体的な状況の中に据えて読むことは困難であるが、つぎの数首は、おそらく当時の状況に関係するものと考えてよいであろう。

『仙樂集』巻一「白蓮花」詞に「曾て北邙の塚墓を見る。古往多少の貴富、限到れば怎生趨り去り、頓に玄元道祖を悟らん（曾看北邙塚墓、古往多少貴富、限到怎生趨去、頓悟玄元道祖）」とあるが、北邙が洛陽の北邙山のことだとすれば、当然長生の行動半径に含まれていたであらう。また、同・巻三「上敬奉三教道衆并述懷」に「昔年遊歴し、曾て嵩陽に到る。達磨面壁し、九載にして真に忘る（昔年遊歴、曾到嵩陽。達磨面壁、九載真忘）」とあることから、

嵩山近辺に足を運んだことが分かるが、それは確実に洛陽滞在中のことである。同・卷一「藏頭折字詩」に「論京華隱大才、□然寒去又温来」、卷三「出家冷七翁昇化云々」に「曾て京華に住み、世に混じて夢を忘る（曾住京華、混世忘夢）」、「京華に世に混じ、独り希夷を楽しむ（京華混世、独楽希夷）」なども、洛陽生活の心情を詠んだものであろう。

長生は土地廟に三年あまり居住したのち、大定十八年（一一七八）の秋に洛陽城東北の雲溪洞に居を遷した（像伝）。『仙樂集』卷一「藏頭折字詩」に「□歴京華厭世塵、□龕雲洞性清新」とあるところから考えると、市中での修行に限界を感じたのかもしれない。門徒が日に集まる（年譜、統編）とあるので、このころ道士として一人前になったと思われる。雲溪のほとりに遷居した長生のために、門人は近くの岩場を穿って洞室を作ったが、たまたま古い石井が見つかり、「寒泉冷冷」と湧出するありさまに門人たちがびっくりすると、長生は「そのそばにまだ二井ある。わたしは前世で修鍊して作っておいたものだ」と述べた。鑿ってみると、はたしてその通りであったので、洞は三泉洞と名づけられた（道行碑）。『年譜』では洞名は三井洞である。

このことに関連して『統編』には、さらにつぎのような尾鱗がついている。——長生が雲溪洞に移ってから、徒衆が日に日に集まった。長生は、ある時にわかに地面を指さして「ここに井戸が三つある」と言った。二丈あまり鑿ってみると、その下に泉源があることが分かった。人々がどうして分かったのかと訊ねると、長生は「前世でここに居たのだ」と言った。大定二十年（一一八〇）に、長生は庵の右にある馮氏の園を指さして、「ここは、わたしが仙去したのちに縁がある。四十年たつて園の松柏が死に、瀧水が西に流れると、ここの地は買わずして手に入るであろう」と述べ、碑を一つこしらえて土中に埋め、「その縁が起これば碑が立つであろう」と言った。あくる年、萊州に帰っ

た。長春真人が西遊した折、雲溪を通ったが、門人が長生のこの遺言について述べた。その後、東海郡侯（衛紹王）の大安二年（一二一〇）に、穀物運送官（運粟有司）が長生觀の觀額を得た。宣宗の興定三年（一二一九）は（大定二十年から）四十年目である。馮氏は園圃を売り、蔡清臣が白金百両で買いつつて、長生の門人の于離峯を住持にした。官庁が松柏を伐採して建築資材とし、また、雲橋を架け、瀧水を觀の所から西に流れるようにして城を護った。長生の予言は、かくてみなが的中したのである、と。

大定二十年（一二八〇）に觀額のない觀が廃止された例があるが（『道家金石略』一〇二八頁「三官宮存留公拋碑」、また『金石萃編』卷一五七、承安二年（一二九七）には、また觀額を売り出し、あわせて「粟を入れ」た者を「官に補した」（『金史』卷五十）。「運粟有司」が「觀額を得た」ことには、そうした背景があり、有司は全真教徒であったのであろう。なお、長春の西遊は北京から居庸関を通って北方ルートでチンギスハンの許に往ったのであり、復路も同様であるから、雲溪を通ったというのは、まったく事実無根である。

大定二十一年（一二八一）に至って、金朝は道士の「遊方」を禁止して本郷に帰すことを決めた（『金蓮』丹陽伝）。これは丹陽の布教活動がようやく軌道にのり、入信する者が多数になったことなどに対する政府側の警戒策であったらしい。<sup>(12)</sup> そのため、長生はほぼ七年間の洛陽生活をたんで萊州に帰った。『仙槎集』卷三「四言絶句」の「縁ありて再び遇い、重ねて東州に到る。外は因果に応じ、内は真修を隠す（有縁再遇、重到東州、外応因果、内隠真修）」は、このときの心情を詠んだものであろう。時の状況に従いながら、それに流されない内面の確立を述べている。

### （三）武官における主教活動

大定二十一年（一一八一）、長生は萊州に帰り、その翌年、大定二十二年（一一八二）には武官に戻って庵を建てて住んだ。太基山の北側で、靈虚觀のもとになったものだという（金蓮）。久しぶりに母親にも会った。長生、三十六歳のときのことである。長生は庵のまわりに檜柏を植え、それらは、やがて鬱蒼とした林となった（金蓮）。四方から教えを受けにやって来る者が日ましに多くなり、そうした状況で、長生は『道德經』、『黃庭經』、『清靜經』などの注解作業をすすめた（続編）。

その年のこと、祖庵から寧海に帰る途中の馬丹陽の一行が萊州を通った。丹陽は三月に濟南府の舜廟に休息し（『金蓮』丹陽伝）、四月に寧海に戻って金蓮堂に居住している（『像伝』丹陽伝）ので、長生が会ったのはその間である。このとき長生は盛服を着て丹陽を迎えた。丹陽がその奢侈を責めると、長生は「わたくしの聞くところでは、修行の人は一日に万両の黄金を使うと申します（予聞、修行之人、日消万両黄金）」と弁解した。丹陽はそこで「一日に万両の黄金を使うというのは、粗衣粗食をすることだ（日消万両黄金、正好衲衣淡飯）」と教え、萊州で醮を行なわせてそのことを明らかにしてみせた（続編）。この年に至っても長生の修行がなお形式的な面をもっていたことが分かる。

あく大定二十三年（一一八三）の十二月二十二日、丹陽は萊陽の遊仙觀で仙去した。このとき長生と玉陽の二人が葬事を取りしきり、百日間、墓守りをしてから、それぞれの地に帰った（年譜）。墓守りをしていた間に、長生は門人の張順真らに手紙を持たせ、当時洛陽に居た譚長真の許にやって「主教」の引継ぎを依頼した。

長生は重陽に弟子入りして出家したのであるが、事実上の指導者は丹陽であった。長生の心中には、もちろん師父重陽は生きており、晩年に至って仙去の氣持を述べた詩詞に蓬萊（蓬島と言う場合もある。現実の場所ではなく、天国の象徴）に行つて重陽に会うという表現もあるにはあるが、丹陽を敬慕した詩詞のほうがはるかに多い。『仙樂集』卷二

『五言絶句頌』に「覚照して天光を見、神清にして道に常あり、塵に応じて万慧を明らかにし、真去して丹陽に礼さん」(十六裏)、卷三「上敬奉三教道衆并述懷」に「真心頓に覚り、丹陽に倣な倣もわん」(十二表)、同・「馬姑到東萊州云」に「既に彼岸に超え、丹陽の教に依らん」(十六表)、卷四「滿庭芳」に「碧霄の外、大羅に帰去し、重ねて馬丹陽に礼さん」(五裏)、同・「惜黃花」に「凡形を蛻し丹陽父に礼さん」(十五表裏)、同・「青杏兒」に「道化は無常を怕れ、三十年総て丹陽を敬す」(十五裏)、卷五「五言絶句頌」に「日月は頓に無常にして、二輪は飛走して忙し、傻猿を住しつかりと縛り得て、真去して丹陽に従わん」(九表)などを見れば、長生の氣持がよく分かるであらう。

大定二十四年(一一八四)正月、昌陽の姜守靜(『年譜』は姜守淨)が長生に醮を依頼し、長生はそれを主宰した(統編)。「年譜」は「守墳百日」の記事に続けてこのことを記しているのであるから、説明不足である。昌陽は寧海州文登の昌陽山のことと思われ、萊陽に来ている長生に萊州武官に帰る前に醮を依頼したことは理解できる。守墳中に短期間昌陽に出むいたものであらう。『統編』は昌陽の醮の記事の後に守墳のことを記しており、この前後の事について記事に混乱がある。『仙樂集』卷三「辛酉歲下元云々」に「甲辰登郡、黃籙重興。昌陽感応、昼見明星」(十一表とあるので、甲辰の年、すなわち一一八四年に登郡(後述)と昌陽で醮を行なったことは確かである。同・「馬姑到東萊州云々」に「昌陽石嶺、有塔善敬」(十七表)とあるのは、昌陽山の形状を記したものであらう。

昌陽の醮を行なった十八日の昼すこし前、胡璋、徐紹祖らが、突然、瑞鶴が飛びまわり、重陽が雲冠に絳服を着、丹陽が三髻をゆって、彩雲の上に現われたのを目撃した(統編、年譜)。こうしたことは道士の伝記にまぎされていくことであり、前年の十月十五日に丹陽が文登で醮を行なったときにも、白亀の背に乗った重陽が空中に現われ、大さわぎになった。<sup>(13)</sup>昌陽の場合、特殊な雲形をそれと見誤ったのか、見たという報告があっただけなのか、真偽は不明

である。胡、徐は昌陽の信徒であらうが、この箇所以外に登場しない。

この昌陽の「神異」は道士たちによく知られていたようで、長生とともに葬事を主宰した王玉陽も、「臘月二十三日齋憶丹陽」で「玄光はず宙の空に奔進し、大丹一粒 雲峰に酔う、仙兄は今朝元しに去り、昌陽に図画して異蹤を顯わす（奔進玄光宇宙空、大丹一粒酔雲峰、仙兄今朝元去、図画昌陽顯異蹤）」（『雲光集』、藏克三冊、卷二・十五裏）と詠んでいる。仙去と昌陽の「神異」がひとつづきの事柄として認識されていたことが分かる。

この年の五月は日照りが続き、登郡の太守が長生に祈雨の醮を要請した。すると海市が竹島に現われ、そのあくる日、応仙橋の西北に丹陽の姿が現われ、十分に雨が降った（年譜）。『統編』では四月十五日と五月の二度にわたって醮を行なったという記事があり、その間に長真に主教を依頼した一件が挿入されている。『統編』の記事には混乱があり、『年譜』に従うべきであらう。

『金蓮』は長生の武官帰還のことから年号にまちがいがあり、昌陽の醮も大定戊申（一一八八）に繫けている。長生が醮を主宰すると綵雲が壇を覆い、白鶴が舞いおりてきた。秋にひどい旱魃があり、雨を祈ることになり、壇に登ったのだが四方を見ても雲ひとつない。ところが長生は「明日のお昼まえ、大雨になるであらう」と述べたが、はたしてその通りになった。その後、山東地方で醮を行なうときは、いつも長生が主宰となり、かならず冷冷たる祥風が吹いて楮幣（紙錢）を捲きあげて登り、感応すること靈驗あらたかであった、とある。『金蓮』に常套の神秘化がめだつが、大定二十四年五月のこととすべきであらう。

大定二十五年（一一八五）四月に洛陽の朝元宮で譚長真が仙去し、長生が主教を引継ぐことになった。仙去のまえ、長真は張順真を呼んで、「教門のことは、わたしの手にはない。丹陽は遊仙となり、わたしは丹陽に朝元（会见）し

た」と述べた。順真に、長生に宛てた手紙を持たせたが、その中に「帰逝」のはなしと、教事を託することが書かれていた（続編）。長生は三十九歳で全真教の主教になったわけである。

この年の秋、濬州に洪水があり、当地にあった長真『水雲集』の版木が散佚した。長生はそれを残念に思い、門人の徐守道、李道微、于悟仙らを寧海に派遣し、州学正の范懌に序を求め、再版を出した（『水雲集』范懌序）。東萊の全真堂が出版の工房となったようである（『水雲集』後序）。

大定二十七年（一一八七）、萊州の人、尹志平（一一六九～一二五一、清和真人）が十九歳で長生に弟子入りした。志平は、十四歳のとき、祖庭から寧海に帰る途中の丹陽が萊州を通過した際にその姿を見て入道を志し、家族に反対されたが、結局逃げ出して武官に來たのである。しかし、おそらく家族の追及を嫌ったためであろうが、間なしに昌邑の西庵に移った。いつもひとりで樹下に坐り、ときに朝までそうしていた。ある日の夕方、静坐していると、長生がふらりとやって来て、自分の首を切り、心臓をえぐり出して、また元に戻した。ハッと目がさめると、これは夢であり、それから大いに悟るところがあったという<sup>(15)</sup>。

この年、長生は『重陽全真集』を山東でも出版するため、曹瑱、来靈玉、徐守道、劉真一、梁通真、翟道清らに托鉢させ、ついで寧海に派遣して范懌に序を求めた。このときに出版されたものは九卷本で、現行の卷九、「辞世頌」で終了するものであったらしい<sup>(16)</sup>。ときに丘長春は龍門山から祖庵に移って二年目、教門の重責は長生にかかっており、范懌が長生について「教門の標的、仙宗の羽儀、一代の師真にして四方の教主たり」と「序」中に述べたのもまことにもつともであった。

范懌はまた長生の『黄帝陰符経註』にも「序」を書いている。これは済南の畢守真の依頼によるもので、明昌辛亥

(二一九二)二月既望の日付がある。同年のこと、駙馬都尉が萊州の守備役として出向してきたが、長生に帰依するものがたいへん多く、異をとねえる者は誰もいなかった。そのことに疑いをもち、尉司の樂武節に命じて長生を捕え、投獄した。ところが、しばらくすると、人々は長生が城南でいつものように道友に説教している姿を見かけた。鄭押獄、王受事もそれを目撃し、長生が獄から逃げたと思い、獄をのぞいて見ると、長生は熟睡していた。二人は驚き、そのことを都尉に具申すると、都尉ははじめて長生が有道者だと悟り、すぐに釈放した(統編、像伝)という事件があった。ただし、『像伝』は駙馬都尉の「僕」が讒言に惑って長生を投獄した、という筋書である。<sup>17)</sup>

右のことは長生の「神異」を示す事件であろうが、『金蓮』には、さらに奇怪な話がみえる。——長生が武官の庵に住むようになって間もなくのこと、郷里の人が長生が人を殺したと訴えて出た。長生は弁明せずに縛につき、百日ばかり牢獄につながれた。呂純陽がそのことを聞き、青い麒麟にまたがって下界に降り、牢屋に現われ、筆を与えて習字を教えた。のち、殺人者が自首し、長生は釈放されたが、そのころには習字の腕が上がり、字には龍蛇がおり上がる勢いがあった、と。

獄舎につながれた事情が異なるので、まえの話と関連があるかどうか分らないが、この話にも何らかの根拠があったとすれば、長生は二度投獄されたことになる。その場合、呂純陽云々のことは脚色にすぎないが、長生は獄舎で習字をしていたのであろう。ただし、これら両方の事件について、長生の詩詞にはそれに言及したものは見あたらない。『統編』には、駙馬都尉の事件につづいて、濰州の溫迪罕ウシヤハン明威なる者が長生のもとに來たが、三日たったとき、長生は「すぐに帰りなさい。そなたの庵が壊れようとしています」と告げて帰らせた。帰ってみると、庵は無事であったが、人が病死していた、という話がみえる。これも長生の「神異」を示す話であり、「人」とは、むしろ明威に有



縁の者ということであろう。

この間、大定二十七年には王玉陽が、二十八年には丘長春が、二十九年にはまた玉陽が、都に召されて礼遇された（年譜）。全真教が新たな発展段階に入ったといえるであろう。<sup>(18)</sup> 明昌二年十月には長春も山東に帰った（年譜）。ただし、明昌元年（一一九〇）正月には、個人が勝手に僧侶や道士になることが禁止され、十一月には、民衆を惑乱するといふ理由で全真教と五行毗盧という教団が禁止された。明昌二年には、二月に、親王や三品官の家に僧尼道士が出入りすることが禁じられ、十月に、太一混元の籙を受けて個人的に庵室を建てるということが禁止された（以上『金史』卷九）。全真教が無制限に評価されたわけではなく、いわば飴と笞の対策がとられたということであろう。明昌二年における長生の投獄や長春の帰郷は、そうした政府の政策に関係があるかもしれない。

明昌五年（一一九四）には、萊州掖城の宋德方（一一八三～一二四七）が長生のもとにやって来た。その年、德方は十二歳であったが、母親に「人は死なないでいられますか」と訊ねたところ、母親に「神仙の劉真人のところに行つて訊ねさい」といわれ、すぐに来たのである。德方は長生に仕えたが、道士として得度したのは玉陽のもとであった。<sup>(19)</sup>

承安二年（一一九七）六月、玉陽はまた朝廷の召を受け、七月に燕都に二親を下賜されて住していた（年譜）。その冬、十月のこと、長生もまた召されて闕に赴いた（『甘水仙源録』卷一「全真教祖碑」）。章宗の「至道」についての下問に、長生は「至道の要点は、欲望を少なくすればその身は安穩であり、租税を少なくすれば国家は安泰だ、ということにあります（至道之要、寡嗜慾則身安、薄賦歛則国泰）」と答え、章宗は「先生、広成子の言葉のようです（先生広成子之言乎）」と気に入られて、天長觀に止住するよう詔勅された（年譜、像伝）。上賓の礼をもって遇され（金蓮、

官僚士庶からことごとく尊敬を受けた。礼部から、靈虛、太微、龍翔、集仙、妙真の五つの観額が下賜された（統編）。すでに述べたように、この年に政府は観額販売策をとっており、換言すれば、勅許の観額のない道観に対しては厳しく取り締まった。すでに明昌六年（一一九五）に、勅額のない庵院はことごとく官に没収する政令が出され、祖庭もその候補にあげられていた（終南山祖庭仙真内伝）卷中「呂道安」伝）。したがって、五観の観額の下賜は長生個人にとつての大優遇を意味する。ただし、『年譜』では、五つの観額は翌年の帰還のときに下賜された、とある。なお長生の詩詞には「武官の仙観、勅額靈虛」（『仙樂集』卷三・四裏「四言頌」という表現があるだけで、他の四観についての言及はない。

『仙樂集』卷四「感皇恩」二首は、この時の心境を詠んだものであろう。

道釈と儒門は、真に法海に通じ、易の妙は陰陽の外に、自然に解す。金剛の至理は、頓に覺りて争なく愛なし。五千の玄言の奥は、夷にして大を明かす。微光は運転し、雲蓋を結成し、霞は輝きて常に体を照らし、何の聖

礙あらん。松は枯れ石は爛るも、亘貌は古今に真に在り。他の年か功行満ち、仙界に昇る。<sup>(20)</sup>（十六裏）

聖観は天長と号し、星冠に雲服し、金玉の体を養成して、真に無朽。信に大道を知り、自然に無中に有を明かす。世華は心に恋せず、王屋に遊ぶ。貧を外にして命を保ち、真を隠して陋に居り、亘初の無相の貌は、豊厚に勝る。桑田の海に變ずるとも、這箇は無形にして堅久。暗に吾が皇徳を祝す、天寿に齊しきを。<sup>(21)</sup>（十七表）

「感皇恩」とは、たんに詞の調名にすぎないが、朝廷からの恩顧に謝するという意味も兼ねさせたものであろう。一首目の三教調和の思想は重陽以来の全真教の精神にそったものであるが、三教を『易』と『金剛経』と『道德経』に代表させることは重陽の説き方とやや力点が違っている。重陽の教説に『易』によるものは多いが、儒家の經典と

しては『孝經』に言及しているにすぎない。長生の詩詞には『金剛經』に言及したものがかなりあり、『陰符經』や『黃庭內景經』への附注を含めて、經典への傾倒度が重陽や丹陽より大きいといえる。ただ、そうした傾向が重陽をはじめとする道士たちの作品の湮滅を防がせることにもなった。

「亘貌」とは「亘初無相貌」のことで、いわゆる一粒金丹などおなじく道士の悟りのありさまであろう。ただ、悟りを自己の内面に限定することなく、天地古今の時空間に遍満する一種の状況として捉える点に道士としての特色がある。

長生の応対はことごとく「上意」にかない（年譜）、承安三年（一一九八）三月に長生が武官への帰還を求めると、天子は長生を敢て臣下扱いにすることなく、許可した（金蓮）。祖庭の庵主をつとめていた呂道安（一一四二～一二二二）が上京して、まだ燕都に滞在中であった玉陽が靈虚觀の觀額を買って与え、祖庭を存続させたのもこの春のことである（年譜）。

武官の靈虚觀に帰った後のことと思われるが、『統編』には、つぎのような話がみえる。呉六先と高明遠という二人の弟子が、長生の厳格さを嫌って、密かに逃げ出す算段をした。長生は郝命清をとおして「わたしは道を了さず、性急な性格である。どうかべつの師を尋ねて欲しい」と言わせた。二人は顔を見あわせて「われわれの心にあることを、師はどうして分かったのだらう」といい、謝罪した。また、赤脚の劉先生なる者が病気になる、一ヵ月たつても治らず、長生のもとに来て気弱なことを述べた。長生は杖を振るって、「お前は以前一年間道に背いたという罪がある。世の中では功績で罪過の埋めあわせをするが、陰理では功も過もそれぞれその報いを受けるのだ。以前の罪過は一年かかって埋めあわされるのだが、いまこうして会ったからには、一ヵ月でもよからう（汝向時有一年背道之愆）。

世則以功準過、陰理則功過各受其報。前日之愆、一年可準。今既相遇、一月亦可也」といった。そこで劉がみずから誓うと、病氣は急に良くなった、と。これらの話は、長生にもまた主教としての一定のカリスマ性が具わったことを示すものであろう。

泰和元年（二二〇）、長生は広陵に遊び、「天道罪福論」を著わした（年譜）。広陵は益都府の広陵鎮のことであろう。「天道罪福論」は『仙樂集』の冒頭に収録されているもので、百二項の罪福を示した長生晩年の定論ともいべき著述である。

長生はさらに西北に足を延ばし、泰和二年には濱州で醮を行なったが、そのとき「瓊葩玉樹の瑞」があった（年譜）。醮のことは前年のうちに長生に伝えられ、長生に「辛酉歲（二二〇）下元、濱州放籙、立余為度師。余不從酬贈」という四言長篇がある（『仙樂集』卷三・九裏）。内容は抽象的なものである。『仙樂集』卷四・十二表「踏雲行」には、長生の作品には珍しく具体的状況を記した詞書が添えられており、それによれば、一二〇一年の十一月十二日、大原宅（輯要では太原宅）に寄ったとき、朝、門外の東南方向に彩霞が現われたという。そこで長生は「遙かに東南を望むや、彩光分明にして、忽然と見わ<sup>あ</sup>れて濱州に往く。醮縁感応して高真に仗り、昔年曾て劉高尚あり（遙望東南、彩光分明、忽然見了濱州往。醮縁感応仗高真、昔年曾有劉高尚）」という詞を詠んだ。劉高尚は馬丹陽の「語録」（藏三六冊）に見え、四十年も環堵に居住し、名利を忘れ、神気の充実に励んだ人物であるが、詳細は分からない。大原云々も不詳である。ともあれ、このときすでに長生は旅の途中にいったと思われる。

「瓊葩玉樹の瑞」とは『統編』によればつぎのようなことである。——泰和二年（二二〇）正月中旬、長生は濱州の醮を主宰した。ずっと降っていた小雪が止んだが、古城の壕水が凍り、そのほとりの千本にもおよぶ樹々も凍って

珊瑚のような姿になり、「瓊葩玉樹」が出現した。さらに杏花が二千も落ちてしまい、無数の小枝が落ちて堆積していた。このありさまを見て、みな「普通の人の至誠ですら天地を動かし鬼神に感じさせるものだから、いわんや有道の人ならなおさらだ。こうした感応があるのは、もっともだ」と言ったことであつた、と。たんなる自然現象がすべて道士の超常の能力に帰せられたことが分かる。

なお、この年の正月十五日、薄沢の韓士倩が長生の『語録』に序文を書いている。これは長生の門人の徐、李がはるばる河東南路の沢州まで持参して序を求めたものであり、士倩は虚白道人と名のつていたので、当時の人には知られた人物であつたのだらう。徐、李とは范憚の許に『水雲集』の序を求めに行つた徐守道と李道微のことと思われる。

東京留守事の劉昭毅と定海軍節度使の劉師魯（仲殊、『金史』巻九十七）は、退官したのち長生のもとに出入りして知遇を得ていた。泰和三年（一二〇三）正月のこと、二人は長生に師弟の礼をとりたいと申し入れた。しかし長生は「お二人は当代の名臣であり、深い恩顧を蒙つた方々です。わたしはまもなく仙去するので、お二人の友になるのにふさわしくありません（公等皆当代名臣、深荷顧遇。吾將逝矣、不足為公等友）」と述べて辞り、それから「正に崢嶸の処に到り、何如にして袖を払って帰らん、我いま須らく踵を継ぎ、首を廻らして希夷に反るべし（正到崢嶸処、何如払袖帰、我今須繼踵、廻首反希夷）」という頌を示した。二人はそれを見て悲しい気持になつた（統編）。この頌は『仙樂集』には収録されていない。

正月二十八日のこと、大師溜王が長生に醺の主宰を依頼した。そのとき仙去の時期を訊ねると、長生は「あと八日です」と答えた。長生は二月六日に羽化したが、つまり八日目である（統編）。溜王とは徒单克寧のことで、克寧は萊州の人で長生とも縁があるわけであるが、明昌二年（一一九二）二月に逝去しており（『金史』巻九十二）、一二〇三年

に長生に醜を依頼するはずはない。別人か、さもなければ長生の「神異」を示す創作である。『続編』の他にはこの話はみえない。

二月六日になると、長生は鼓を鳴らして人々を集め、仙去の時期が来たことを知らせた。弟子たちに「みなよく護持して、怠ってはならない（各善護持、母生解怠）」と告げ（像伝）、左脇を曲げて枕とし、速やかに仙去した（金蓮）。左脇を枕として仙去した点は丹陽、長真もおなじである。享年五十七歳であった。

長生の作品には『仙楽』、『太虚』、『盤陽』、『同塵』、『安閑』、『修真』の六文集があったというのが（像伝）、現在見られるのは『仙楽集』だけである。また『道德註』、『陰符演』、『黃庭述』が世に行なわれたが（像伝）、『道德註』は伝わらない。しかし語録の内容はほとんど『道德経』の解説であり、じつはこれが『道德註』であった可能性があり、そうでないとしても長生の『道德経』についての解釈は語録によって十分に窺うことができる。長生の法灯は宋披雲が襲った（道行碑）。元代には、洛陽雲溪の三井洞は長生万寿宮という道観となった（像伝）。

## 二 劉長生の教説

本章では長生の詩詞や経注によってその教説について考察するが、いうまでもなく道士の書く文章は方便にすぎず、自己一身の修行や、布教や弟子の養成などの社会的活動に本領がある。また、詩詞に使われる用語は象徴的なものが多く、具体的に把握することは極めて困難である。したがって本章で検討する教説も表面的なものにならざるをえないが、重陽の直弟子七人（いわゆる七真）のうち、長生は道教經典に附注した点に特色がある。郝広寧も經典の研究を

したが、もっぱら『易』一經に限られていた。そこで、長生については、經注の教説を探ることが、重要な点となる。さらに、晩年に至って「天道罪福論」を著してさまざまな行動が呼びおこす罪福についてまとめているので、まずこれらの分析から始めることにしよう。

## (二) 「天道罪福論」

「天道罪福論」は「火院の罪なきに、清涼の福を賜う（無火院罪、賜清涼福）」以下「亘古の形を見れば、著相の罪なし（見亘古形、無著相罪）」に至るまで百条の罪福が羅列され、最後に「上元賜福、中元赦罪」、「下元解厄、三元救世」と述べてしめくくりとする。一見して極めて形式的でしかも執拗であり、内容としては並列的で緊密な構成力に欠けているように思われる。これは長生の作品に共通して感じられる特徴である。しかし、一般的に宗教經典の文句には反覆が多く、長時間継続して誦経することによって三昧の境地に誘導することも宗教的効果の一法であろうから、長生の方法はすこぶる実践的であるとも考えられる。結末の三元（三官）は当時ひろく信仰されており、長生は三元の神を持ち出すことによって人々の信仰心に安心感を与えたと考えられる。

① 百項のうち、第一から第四十九までは「無□□罪賜□□福」の形式である。はめ込まれる四文字のうち、上二字をA、下二字をBとすれば、ABは対概念で、地獄―天堂、有為―無為、輕人―重己、俗惡―道善といった具合である。しかし地獄の罪がなければ天堂の福が賜あたられると述べることが、これを誦する者もしくは読む者にどのような具体的行動（修行）を喚起するかを考えてみると、ほとんどたんなるお題目である。しかし、概念としては誰にも分かる明白なものであった。長生は、そうした平易な言葉を羅列して一定の超俗的雰囲気を生み出したのであ

う。

四十九項のAについて、概略分類してみると、貧姪、恋富、多藏、揀択など、むさぼる方向のものが四、憎愛、万愛、妬嫌、恩冤、嫉妬など愛憎にかかわるもの五、毀人、輕人、慢人、攀高、自高、損人など自己顯示にかかわるもの六、惡濁、讚邪、姦狡、俗惡、私邪、懷惡、惡逆など邪惡に属するもの七、苦惱、妄想、分別、縦心、狐疑、有為、是非など心の働きの迷いに分類されるもの七、恋世、惡濁、恋有、人道、生滅など俗世間に關するもの五、著身、怕衰、恋仮、寿者、狠毒など身体にかかわるもの五、退道、妄伝、損氣など修行にかかわるもの三、火院、攀縁など家族に属するもの二、害命、殺害など殺生の問題が二、その他、剛硬、動靜、地獄である。

右の分類は嚴密なものではなく、他の考え方もありうるが、全体として常識的なものが多いといえることはいえる。まとめれば、自分の感情や世の中に執著を持たず、よこしまな心や自己顯示の心、思慮分別を捨て、身体に対する執念も持たない、ということになる。これは、ほとんど世俗倫理の範圍に収まることがらである。

② 第五十から第七十三項までは「無□□則賜□□罪」の形式で、Aの部分に当たる言葉はプラス方向のものとなる。①のグループのABが逆転した形式であるが、②のグループのAは天から賜与されるものでなく自分から勤めなければならぬことであるから、積極的な内容となる。分類すれば、通變、明見、真禮、真常、靈明など知慧の働きのかわるもの五、公平、忘貪、常情、就下、遠小危、禁口など平常心を保って静かな氣持でいるもの六、善道、悟道、鍊形、悟真、大達、順道など道に即するもの六、清深、善福、三孝、愛善、福慧など善行に關するもの五、厭寵、厭世など超俗的なもの二、である。明知の働きのよって道にすすむことが強調されているといえる。

③ 第七十四から第百項までは上部は「無□□則」あるいは「□□□□」、下部はほぼ「免(消、救、無)□□罪」



の形である。「無□□則」は五項で、Aの部分はマイナス価値の言葉であり、害物、恋情、幻形、生楽、新愆である。おおむね世俗の情に執著することとしてよい。

その他の上部四字句は積極的内容であり、「陽道の行を積む」、「陽道の功を修める」、「無為の道に達する」、「己の過達を捜す」、「四生の形を救う」、「五道の転を出る」、「福地の隠を去る」など修行や善行に関わるもの七、「普ねく敬するを意う」、「穀食の居（聖人のありかたを示す『莊子』天地篇に由来する表現）を悟る」、「三聖の言を悟る」、「明・晦・謙に通ず」、「性、今古に通ず」、「靈琴の響に通ず」、「黒・白・明を知る」、「三皇の始を明かす」、「亘古の形を見る」など悟りや知恵に関するもの九、「天条に順う」、「天地の穀を出る」、「天道の通ずるを悟る」、「道の無形を見る」、「天道の夷に通ず」など天や道を述べたもの五、である。「非理の賄を愛ず」は例外のマイナス価値のもので、以上で百項である。

第三グループの内容は悟りや道、天などの積極的価値に関わり、長生は第一グループの世俗倫理の次元から順次宗教的世界に誘導してきたのである。一項目ごとの前後関係にはほとんど関連性がないが、全体として、長生の構想が日常卑近な問題から超常幽遠な世界へと視点を移す点に存したことは明らかである。

罪福の内容について若干の補足をすれば、①のグループの福には、通仙、洞天、松筠、天祐、仙伴、天堂、超昇、天道などの仙人や天堂に関するもの、安楽、如意、長生、全身、延年、心安、益寿、修生など安心長命に関わるものが多い。②のグループの罪には、輪廻、幽冥、拔舌、刀山などの死後の状況や、寿夭、多辱、危険、惡報などの多難多災を説くものがめだつ。③のグループの罪にも、饒湯、死苦、永沈、陰路、投胎など死後のことがらに関するもの

が散見する。長生は、人々に天堂を説いて道に進ませ、地獄で脅して善を奨励した、ということになる。ちょうど重陽が丹陽を入道させるときに説いた説き方とおなじようなものであるが、重陽ほどの説得力は感じられない。罪福の因果関係が常識的で全体として並列的な印象が残るからである。

(二) 『黄帝陰符経註』

『黄帝陰符経』は三百余字の短経であり、長生の注も長大なものではないので、各経文について附注の大意をとって検討することにしよう。

神仙抱一 演道章 上

1 觀天之道、執天之行、尽矣。

「觀」とは五眼の働きが完璧なことで、五眼とは天眼、慧眼、法眼、道眼、神眼である。五光が明徹ならば五蘊は空に帰し、天道が見える。人身も天の氣を受けている。「道」とは天地万物の外の、虚無の本体のことである。人が虚心ならば、至性と道相は一致する。

「執」とは真を守って偽らざること、正を悟って邪ならざることである。天は万物を生成しても、万物をわがものとしなない。人が何事につけ憎悪や愛著の念を持たなければ、天の平等とおなじになる。もし天の理に依らず、濁悪邪姪を欲しいままにすれば、多病短命で地獄に落ち、来世では人身を失ってしまう。もし天の道に依り、常に善ならば氣が和し、常に清ならば性が明らかになり、常に情を忘れれば命を保ち、常に無染ならば道が明らかになり、常に天

条を犯さなければ無罪である。

## 2 天有五賊、見之者昌。

「天には五賊がある」について。天には五方の正気があり、人身中で神の母となる。周天十二時中、自然に抽添して運転し、至妙で窮まりない、これを「無中の有」という。天地は陰陽の秀気によって万物を生じ、人は（そのうちの）五穀を食べて身体を養う。滓穢を水火に沈め<sup>(23)</sup>、五穀の精を保って命とする。命は性を得て長らえ、性は命を得て長寿となる。命とは北海の烏龜（下・6）である。丁翁<sup>(24)</sup>が常に抱いて身体となる。「五賊」とは真陽である。天の真陽が真陰を見ると、五賊は北海の宝を盗む。これを宝と「する者が昌<sup>さか</sup>ん」なのは、「万物は人が盗むもの（中・1）」と  
いうようなものである。

## 3 五賊在心、施行於天。宇宙在乎手、万化生乎身。

「五賊が心に在る」とは、五行の顛倒である。「心に在る」ならば、真水が上昇する<sup>(25)</sup>。逆だと心竅は通じず、腎水が下行して、死路である。世の中の、聖人の道に到達していない人々は、みなそのようである。正道は日月の光のようなものだ。聖人は「宇宙」の陰陽の変通、天地の交泰を掌握している。

「万化が身を生ず」るのは、万化して身体となることである。万物のうち、人だけが至尊至貴であり、造化を奪い、身外の身を内修するのであり、これを「道を得た」という。万化に通曉し、人々を救い、身体のもろもろの桎梏や生命の儚さ、世の夢幻なることを悟り、濁惡を辟けて清善につき、世俗のしきたりに従いながらも内面は太上（老子）や仏陀の教えを行なうこと、これを「その徳を全うする」という。

## 4 天性人也。人心機也。立天之道、以定人也。

「人」の「天性」には善惡そのほかさまざまな違いがあり、昔から今に至るまで、生まれかわり続けて止むときがない。「人心」の「機」は日常に万変し、清濁賢愚や愛憎是非など、「心機」を察すれば人性が分かる。

「天の道を立つ」について。愚人は天が四時を変化させ万物を生成するなど、その恩の大なることを知らず、富貴なる者も貧賤なる者もそれぞれ思いのままに生きているだけである。道は物を生み、樸が散じると器となって世の中の役に立ち、万民は「天の道」を喜ぶ。

「以て人を定める」について。賢者は天道の理が暗々のうちに行なわれていることを明らかにし、もし人がその「天の道」を行なえば、その徳は人々を安定させ済う。もしも万化万法をすべて明らかにすれば、万物を私せず万塵に染まらない。性は命に通じ、命は天に通じ、天は道に通じ、道は自然に通じる。内面的には道を全うし、外面的には徳を全うすることを「賢聖」という。

##### 5 天発殺機、龍蛇起陸。人発殺機、天地反覆。

「天が殺機を発す」とは、暖が極まると涼に変わり、万木が枯れ、龍は海に隠れ、蛇は穴にもぐるということである。冬至になると一陽が生じ、春分になって万物が活動しはじめ、龍蛇が陸で動き出す。

「人が殺機を発す」とは、人性すなわち純陽が耀くことである。人心がすべて望むことは、世の中への執著、家族への愛情、名利への欲求であり、酒色財氣に迷い、執念は尽きるときがない。念々の欲情は、みな陰に属する。性が陰に執著すると、下では腎海の金亀が排泄され、上では重楼の玉汞が消えてしまう。<sup>(26)</sup> 外陰が旺盛だと内陽が衰弱し、死亡して冥界の鬼となる。人が至道に明らかにになり、万物の存在に悟徹すれば、それを「陽が陰を殺す」という。

「人が殺機を発す」れば、群陰を散り尽くし、魂魄は清静になり、陰陽は顛倒する。「天地が反覆し」て造化し、

三（丹田の）丹を結成し、天地の殻を出、身体から超脱して身外の真身を顯現する。

#### 6 天人合発、万変定基。

「天人」とは、人性が天と通じていることである。「合せて発する」と、心が物を尽くす。つまり世の中の榮枯盛衰、死生禍福などあらゆることに通曉する。人が天理に通じれば、真の榮となつて枯れず、真の生となつて死なず、道の恒常性に明らかになる。道が恒常であつて「万変」に通じることが、性の「基」本を「定める」。至性が通じ極めて、自然に万通すること、ちょうど水が方円曲直に従い、万川が江河淮済に合流し、大海に流入して混成して一に帰するやうなもので、これを「深く通じる」という。

#### 7 性有巧拙、可以伏藏。

いにしへの悟道の人は、内「性」は善「巧」なのに外面は惡「拙」のようであつた。「そうして伏藏すべし」とは、内光を隠して表わさないことである。『道德經』第一章の河上公注に「美玉が石中にあるように、明珠が蚌蛤中にあるように」とある。鸚鵡はしゃべれるために籠に捕われ、鳩は惡声だから自由である。それゆえ世人の偽巧は万禍を生み、真拙は清福を生む。天はもの言わず情がないから變通して老いない。人が天道を明らかにしようとするならば、言を忘れれば造化の妙を窮められ、情を忘れれば亘古の姿を明らかにできる。これが道を楽しみ命を保つ要諦である。

#### 8 九竅之邪、在乎三要、可以動靜。

「九竅」は九通の陽径である。通じないのは九陰が「邪」<sup>よこしま</sup>に閉じてしまうからである。人の心は空虚な方寸で、なかに靈明がある。上人は心に九竅があり、中人は七竅、下人は五竅、心に竅がないのを愚人というのであろう。陰が生ずると性は陽の耀きを濁らせ、神の清さを弱めてしまう。

「三要に在る」について。天の光には日月星、地の宝には金玉珍、道の通には鉛汞真<sup>(28)</sup>がある。

「そうして動靜すべし」について。天が動けば三光が照らし、地が靜かなら三宝が通じ、妙が明らかなら三靈が結ばれる。<sup>(29)</sup>「動」とは形を動かすこと、「靜」とは性を靜かにすることである。いにしへの賢者隱者は世にまじつて心を動かさず、山に居て靜に執著せず、動中に靜があり、靜中に喧がなかった。「動靜」をとともに忘れれば、道の恒常にして玄妙なることを体得できる。

9 火生於木、禍発必剋。姦生於国、時動必潰。知之修鍊、謂之聖人。

「火が生ず」とは、人の心が日常働いて、万変の惡をなすのである。<sup>(30)</sup>「木に於て」とは、つまり人性である。念々に無明の火を発すれば、その木徳たる性を焚くのである。

「禍が発すれば必ず剋つ」について。吉に違えは凶で、福を失えば禍である。「剋」とは、真を殺すことである。

「姦が国に生ず」について。『道德經』に「智でもって国を治めなければ国の幸福、智でもって国を治めれば国を賊す」(六十五章)とあり、佞姦な人物が国に生まれれば、万民が無事であることはむずかしい。「時が動けば」そこで「必ず潰れ」散ってしまう。

「それを知って修鍊する」について。五金八石を焼く修鍊のことではなく、性命を修すること、三教の奥深い理に通達することを「道を悟る」という。常に世を慈しんで人々を救い、天の恩を知んことを「徳を積む」という。

黄帝が道を悟って『陰符經』が出現し、周のときに金輪王が釈を悟って『金剛經』が出現した。仏になつて後、釈迦牟尼仏と号した。『金剛經』の三十二分(三十二相)の要諦をいえば、我相、人相、衆生相、寿者相を除くことであり、四相がなければ心には万愆がなくなるのである。天に雲なく、性は朗月のように、おのずから円明なる正性が現

われる。性とは樹の根のようなもの、身とは人の形すがたのようなもの、万法とは樹の枝葉のようなものである。『陰符経』にみえる造化の主旨は、花が咲いて実を結ぶようなものである。世間の、道を学ぶ者は中途はんばにしかりに通じず、四相心を持ったまま自説を是としているが、そういうのを「傍門」というのである。

## 富国安民 演法章 中

1 天生天殺、道之理也。天地、万物之盜。万物、人之盜。人、万物之盜。三盜既宜、三才既安。

「天が生み天が殺す」について。春には温和の気となり、「天が」万物を「生む」。秋になると金風が動き、万物が枯れ、「天が殺す」。生殺の道理は、天は無情であつて、自然である。

「天地は万物が盗むものである」について。天地は四時があつて移り変わり、造化して万物を生成する。万物のうちには天地陰陽の秀氣が蔵されており、万物が盗むものは秀氣である。

「万物は人が盗むものである」について。人は万物の精を盗み、天地の秀氣を奪うのである。

「人は万物が盗むものである」について。人は万物のいいところを欲するから、眼は五色を見、耳は五音を聴き、飲食を欲しいままにして邪に従うから、楽しみ極まって哀しく、命を喪うのである。もし世を棄てて無情を悟れば、外物に盗まれることはない。

「三盗が既に宜しい」について。無窮の至宝が盗まれれば、どのように金を積んでも、買ひもどすのはむずかしい。「三才が既に安らか」について。三聖に帰依し、三乗を明らかにし、三皇を悟り、三光を運び、三車を推し、三田を耕し、三火をめぐらし、三丹を結び、三陽を現わし、三天に上昇し、真にして不朽、生じて不滅、物の道を尽くす

のである。真と道とが同体になれば安らかなのだ。

2 故曰、食其時百骸理、動其機万化安。人知其神而神、不知不神而所以神也。

「その時に食べる」とは、餓えたときにはご馳走も惜しまず、まずい食べものでも厭わないことである。殺生せずとも（餓えたときには）なまぐさを食べ、齋食をせずとも餓えたときには粗食美食を問題にしない。行住坐臥にそのように自在であれば「百骸が理まる」のである。

十二時中、心を真にして湛然としていなければならない。「動」とは、心を動かしてはいけないということ、そうすれば内面に宝光が現われ、物に対応する。形の「機」を動かす者は聖人賢人である。君子はそれを智といい、將軍は計といい、常人は機といい、小人は脱空からつぽという。聖人は智が広く理解も深い。「万よろずの」ことに通じ、「化」を闡明して頓悟すれば、「安」静の道が生まれる。

「人はその神を神とすることを知っている」について。世人はただ地祇や陰界の神を神とすることを知っているだけである。木雕泥像を神としている。愚者はおよそ一分の愆過を行なえば天が一分の禍患を降すことを知らない。猪や羊を殺しながら銭馬（紙銭）を焼いて祈り、治病や幸福を求めている。

「神でないものが神であるわけを知らない」について。天上の陽道の至神があらゆるところで人々を観察し、その善悪の行ないに対して吉祥や禍患が下されることを知らないのである。万物のうち、もっとも霊ももっとも通なるものは自己の元神であり、天地に通徹して耀いている、ということこそ世人は知らない。

いにしえの賢聖はすべて道を悟り真を修めて、凡から聖になった。西天では一代から二十八代の仏に至るまで、修行をしなかったときは衆生にすぎず、六根が清浄に、五眼が円明になり、四相を滅してから仏と呼ばれたのである。



仏とは人の性である。性とは神で、名が違っただけである。釈門では四相を除去した性を仏といい、道門では四相を忘却した神を仙という。

### 3 日月有数、大小有定、聖功生焉、神明出焉。

「日月に数<sup>きまり</sup>がある」について。夏至の昼は六十刻で、それから漸減して一陰が生じ、冬至の昼は四十刻で、それから漸増して一陽が生じ、卯の時に東海で日が生まれ、酉の時に西山に日が墜ちる。『清静經』に「大道は無情で日月を運行する」とある。「日」とは、慧光がめぐって抽添に数<sup>きまり</sup>があること、「月」とは、人の命である。男子は十六歳でその二八の真金<sup>(31)</sup>を完成するが、もしも無情ということ悟らなければ、三年で一兩を減らし、六十四卦<sup>(32)</sup>が尽きてしまうと腎海は枯竭する。多欲ならば卦が尽きる前に死んでしまう。

「大小に定<sup>さだめ</sup>がある」について。「大」とは道で、道は大にして天地を包含し、「小」とは微で、微妙なことを論ずれば毫芒の次元のことになる。天地は量れず鬼神は見えないが、自然に方寸には定<sup>さだめ</sup>がある。

「聖功が生まれる」とは天の道のことである。天の大恩が生まれると人を済<sup>い</sup>つて形<sup>かたち</sup>を養わさせ、道聖の功が生まれると人を救つて真を修めさせる。

「神明が出る」とは、隠には神が三宮に遊び、顯には神が八表に通ずることである。

### 4 其盜機也、天下莫能見、莫能知。君子得之固窮、小人得之輕命。

「そもそも機を盗む」について。万物の機は天地の気を盗んだものである。

「天下（の人）は」天の大恩が生じても「見ることができない」「知ることができない」について。愚者はただその身を養うことを知っているだけで、天が恩を与えて万民を養い、時節に応じて氣候を変化させることを知らない。

「君子はそれを得ても固<sup>もと</sup>り窮<sup>きう</sup>す」について。道に通じれば天地が通じ、万化、神が通じ、機に應じて万変して真に返る。

「小人はそれを得ても命を軽んず」について。小人は時を得れば天地、賢聖、国法を敬わず、物を害し人を傷つける。愆が極まれば天が報いる。君子は性を重んじ、賢聖に通じ、小人は命を軽んじ、傍生に墮ちる。

強兵戦勝 演術章 下

1 瞽者善聴、聾者善視。絶利一源、用師十倍。三反昼夜、用師万倍。

「瞽者は善く聴く」について。人の目は五臓の窓であり、外の風が中に入るように外のものを見る。もし紙や席で風を遮ってしまうと風が入らないように、瞽者は外のものを見られない。外景が中に入らないと、空中に真の響がひびくように、無声の声を善く聴く。

「聾者は善く視る」について。世の俗氣を聞くだけなら聾のようなものだ。道念が耳にとどいても邪言を聞くならばやはり聾のようなものだ。理を正し、善いことを択べば、耳は壁に鑿った穴から外光が入るように通じる。無物の物を視、恍惚の妙を明らかにする。

「利の一源を絶つ」とは、貪を忘れて清平であることである。利を滅して財をため、有余を損して不足に恵むのである。

「師を用いれば十倍」について。至静至明ならば十倍の功があり、人々を利し人を愛すれば十倍の福がある。

「三たび昼夜が反る」について。一反は上元賜福で氣が降って清である。二反は中元赦罪で神異にして靈である。

三反は下元解厄で命が通じて陰が陽になる。

「師を用いれば万倍」について。世の物売りは苦心慘憺しても倍の利をあげることもむずかしい。悟道修真する者は無窮の福を得て、天上の富貴を受け、世の利益の万倍にもなる。

## 2 心生於物、死於物、機在目。

「心が物に生じる」とは物の外面に執著することである。心が死ねば靈物に通ずる。世の生を求むる者は性は死路に歸し、道に到達する者は死を守って神は生路に遊ぶ。道と俗との生と死は正反対である。

「機は目に在る」について。俗人の目が物を見ると、心が機に動き、利を求めて貪り、害と争いが生まれる。慧目が靈物を見ると、天機が明らかになり、物も我もともに滅びる。俗の機は自己に益して他人を損し、道の機は自己を損して他人を益する。

## 3 天之無恩而大恩生。迅雷烈風、莫不蠢然。

「天には恩がない」について。気が充満して物を生じるが、生じた物を所有するわけではない。「大恩が生じる」とは、万物の生成である。万物は天地の気を受けなければ造化成形できない。天恩と人恩は異なり、天は報を求めない。「迅雷」が鳴れば甘雨が降り、生が萌す。「烈風」が動けば浮雲が散り、青天が現われる。

「蠢然としないものはない」について。蠢動く生きものは、胎卵湿化のどの種も、天の気を受けて生まれる。いわんや無生の万物はなおさらである。

## 4 至楽性余、至静性廉。

道性の無余を常に楽しみ、俗世の有余を厭う。我には喜びが無いので憂いもなく、人には歎びがあるので愁いがあ

る。

「至静の性は廉」について。「至静」ならば物を看破し、「性は廉」とは蓮が水に著かないようなものである。道に到達した人は塵に染まらず欲もなく、宝鏡を磨いて物の形影に応じる。それに対して、有を棄てて無に執著するのは取捨の妄想があり、高下を分別するのは得道の妙を誇ることだ。『道德経』に「善言は美ならず、美言は善ならず」（八十一章の主旨）とあるが、正道の真言は美ならず、邪法の偽伝は過美である。邪に執著すれば大道には到れない。

5 天之至私、用之至公。

天は恩を施しても下知させないのは「至私」である。生成して人の世を濟うのは「至公」である。有道の人は石中の玉のようなもので、世俗の眼にはその価値が分からないが、磨けばいつかは身外の身を現わして大器となる。無道の人は虫に食われた樹のようなもので、天眼に見すかされて斧で切られると、すぐさま倒れて永遠に幽冥の世界に堕ちる。道德を崇ぶ賢達には天の報いは至私から至公へ、色財を競う匹夫には天の報いは至公から至私になる。<sup>(33)</sup>

6 禽之制在気。

「禽の制」について。百禽のすぐれたものは南山の赤鳳<sup>(34)</sup>である。輕清の氣に通じ、風に乗って九霄に入る。

「氣に在り」について。濁は地に沈み、清は天に昇る。烏龜<sup>(35)</sup>は乾を吸い北海で輕清の元氣を八百十丈吐きだす。これはつまり九九の陽数である。禽の三寸<sup>(37)</sup>では沖和と元氣が接して散らない。氣は神に通じ、神は道に通じ、道は自然に通じる。

7 生者死之根、死者生之根。恩生於害、害生於恩。

「生とは死の根」について。世間では生の厚きを求め、利が多くなるから身を害し、死路に入る。

「死とは生の根」について。道を抱けば生を求めず、徳が多くなるから身を全うし、生路に入る。迷者は昼は世間の財を貪り、夜は内面の宝を失う。悟者は世夢を坐忘し、寝れば内面の真を守る。

「生に恩をあたえるのは害だ」とは、恩や憐みの感情は偽の次元のもの、六賊は暗に真を害す。

「生を害するのは恩においてだ」とは、「生を害す」とは知慧の剣で愛欲を断つことであり、「恩においてだ」とは、道に到達した者は天の恩を知っているということである。敵(ひな)のように人に食べさせてもらえば人から害されず、鶉のように一定の住所を持たなければ恩の情は生まれない。

#### 8 愚人以天地文理聖。我以時物文理哲。

「愚人は天地の文によって聖を理える」について。愚者は命を失うときに天に祈って安きを求め、日常に罪を犯しながら聖に祈って福を求める。賢者は命を保つことを知っているから、みずから神霊で、罪がないから道の福は大きい。大地の衆生は業を改めず、聖賢に祈っても万禍は免れがたい。中華の男女は真を崇び志があるから、天地に祈らずとも常に善福である。

「我は時物の文によって哲を理える」について。我は周天十二時中、万物の変化を窮め、文が立派なら万華が顕らかとなり、理が明らかならば万通が顕らかとなり、哲が極まると万化を明らかにし、自然に清静無為である。自然とは道、清とは天、静とは地、無とは性と道とが一体となること、為とは恩を施して報を望まないことである。万物の造化は人の造化と異ならない。天地は気を運らし、物は通変する。

以上が附注の概要であるが、この後、内丹関係の用語を十二カ条にわたって羅列し、「恍惚のうちに隠顕して測りがたい、それが道の働きである」と結束して終了する。

内容を簡単にまとめると、天と人とを対応させ、天の現象に人の内面を合致させれば真が得られる、というに尽きる。天（天地として表わす場合もおなじ）とは、陰陽を反覆して四時をめぐらせ、万物を造化生成するが、所有もせず、告知もせず、自然であることがその道である。万物は生成される過程で天の秀気を取りこみ、人はその万物の精華を取りこむので、天—万物—人は連関し、気が通じ合っている。ところが、人は俗世に生きるもので、そこでの欲望にとられ、天から与えられた元気を失って死亡し、幽界に堕ちて輪廻をくりかえす。そうならないためには、俗世の刺激や利害を断ち、至静の境地で性命を修行しなければならぬ。天の気は人身中で神となつて運行するので、さまざま工夫をこらして純陽の耀きである性を保ち、天の道に即して身外の身を養成しなければならない。長生の言うところは、ほぼこのようになる。

長生の解釈の特色について少し補足すると、天人の関係を性↓命↓天↓道↓自然（上・4）と捉え、命が性を得れば久、性が命を得れば寿（上・2）とし、また、どちらかといえば体内の気の運行に力点を置いて説明していることから考えると、長生は『陰符経』の附注作業においては命のほうをやや重視したか、少なくとも性命を同等に見たと思われる。これは、どちらかといえば性を重視する重陽や丹陽とやや違っているようにも思われるが、それは『陰符経』という対象に規制されたものであつて、長生の他の文章や発言を併せ見れば、やはり性を第一義的なものと考えていたと思われる。

また、雕像泥像を神として拝することや、殺生しながら紙銭を焼いて福を求める矛盾を批判しているが（中・2）、上元賜福など三元については言及し（下・1）、通俗的信仰をかならずしも排除していない。

下章の八、つまり最後に、「業」を改めない「大地衆生」に対して「崇真有志」の「中華女男」を比べているが、

この「中華」という表現は長生の文章に散見するものである。そこに長生がどのような意味をこめたか、なお検討する価値はあるであろう。

(三) 『黄庭内景玉経註』

『黄庭内景経』は「上清章第一」から「沐浴章第三十六」に至るまでの、四百二十七条の七言句から成りたっており、<sup>(39)</sup>長生は各句について四言四句の解釈をつけている。注解であるから経文に限定されるのは当然であるが、長生の特色も認められる。ここでは、その点について、ごく簡単に検討しよう。

まず、経文に即するというより、長生流の内丹の立場で附注していることが挙げられる。これは全篇にわたって認められることで例示するまでもないが、たとえば「腎部章第十二」の第六句「上致明霞日月煙」(以下、十二―6のように表記する)に「致虚極妙、兩耀交光、大丹九転、体遍純陽」、十八―1「三関之中精氣深」に「陽関常開、陰門永閉、中明顛倒、水火既濟」(三関は経文では口、足、手の天地人三関のこと)、二十一―4「六龍散飛難分別」に「龍蟠離穴、虎遶坎宮、甲庚交位、道顯神通」、二十七―3「須得至真始顧盼」に「至明顛倒、木金相間、無物之真、天眼顧盼」、三十四―1「肺之為氣三焦起」に「三魂既清、三毒尽滅、善採黄芽、真収白雪」などと附注していることを見れば全篇の傾向が分かるであろう。

修行の到達点は、むしろ全真にあり、それに因んだ表現も散見する。十五―7「三呼我名神自通」に「喝散陰魔、呼聚陽神、神通万一、方号全真」、十九―8「問誰家子在我身」に「見道明子、得永全真、聖賢為伴、風月為隣」、二十五―2「三五氣合九九節」に「三神抱道、五彩飛光、大和明内、体変重陽」、二十六―4「可以廻顔填血腦」に「和

血固精、調氣順神、鍊真合道、及可全真」などと附注したものはそれに直接関わり、二十八—5「字曰真人巾金巾」に「至理金真、華陽妙巾、六銖光顯、二八金身」と附注したのは、王重陽が崑崙山で工夫した九転華陽巾を踏まえている。

登仙して赴く境地のことを崑崙、蓬島、瀛洲、玉京、蓬萊、三山、十洲三島などと表現することは重陽や丹陽の詩詞にも頻出し、身外之身、不神而神、白蓮出水、死生兩路、明明禍福などは『陰符經』の注にも出た表現で、当然のことながら、そうしたものは数多い。

「中華」はここでは頻出し、「巨海明珠、崑崙美玉、運入中華、無窮仙福」(六—3注)、「中華神宅、瑩瑩方円」(七—12注)、「中華上国、一者帝王」(十五—1注)、「中華聖教、治世修真」(同2注)、「嵩陽勝景、隱在中華」(二十四—1注)そのほか数例があり、直接には丹田を指すが、中国のことを示す場合もある。にわかには断定できないが、長生が若年のころから修道を志望した遠因の一つに異民族による支配への反発があったかもしれない。長生の実際の言動には、それを伺わせるものは何もないが、「中華」の用語を頻発することは重陽や丹陽にない長生の特色である。

『陰符經』や「天道罪福論」に三元への言及があったが、ここでも三元が出る。七—15「非各別住居腦中」に「上下三官、混合一同」とあるのは、三丹田中の神気が泥丸に集まることであろうが、經文の文脈では、ここで三官を出す必要はない。十四—11「役使万神朝三元」に「天元降福、中元赦罪、地元解厄、万神朝会」、三十六—19「伝得可授告三官」に「三元功畢、上達三官」とあるのは經文を説明したものであろうが、長生は三元と三官を別けていたようである。いわゆる天地水の三官を三元と呼んでいるので、この三官は丹田の神気としてよいであろう。

通俗的な問題については、八仙への言及が珍しい。四—9、十五—21、三十三—18の附注に八仙の名がみえるほか、



二十一—1「瓊室之中八素集」に「三山宮室、八仙会集、過海乘風、各有妙術」、二十五—3「可用隱地迴八術」に「八仙会上、各有芸術」とあるのは、八仙過海伝説の形成についての早い時期の資料となるものであろう。八仙過海については、陝西の人である重陽は関心を示さず、丹陽もまた問題にしなかった。また、玉皇信仰形成以前の経である『黄庭内景経』について、長生は最高神として玉皇を登場させ、天皇、玉帝などとも呼んでいるが、これもまた道教中の最高神格として当時すでに一般的に信仰されていたと思われる、八仙への言及と並んで長生の通俗性を感じさせる。ただし玉皇への言及は重陽や丹陽にもみられる。

このほか、太上（老子）の尊重は当然として、十三—12「注念三老子輕翔」に「仙老文宣、妙智難量、得一方知、体变真陽」とあるのは、三教帰一の立場の現われであろう。ただし、本注においては、その立場は稀薄ではば一貫して内丹の立場から附注しているところに特色がある。

#### （四）『無為清静長生真人至真語録』

本資料は語録の表題を持ち、質問者が提出する言葉について長生が回答する形であるが、実質的には『道德経』を敷衍したもの、すなわち長生流の『道德経注』である。質問項目は法、空、知、見から以下、衆に至るまでの一字一項目で全八十項目である。長生の文章の特色をよく示して、項目は、善悪、賢愚、生死、貴賤など対になるものが大部分を占める。

形式を例示すると、第一の「問法」は、「法とは何ぞや」という質問に対して、長生がつぎのように答える。そもそも道（教）に通じて真空に達することを法という。そもそも積（教）に通じて無生に達することを戒という。

法を授けられた者は、万惡を<sup>な</sup>尽くすことができず、万理に通じることができない。戒を授けられた者は、万善を<sup>な</sup>尽くすことができず、万慧に通じることができない。道法に通ずれば自然に達して清淨無為である。釈戒に通ずれば我人を<sup>な</sup>尽くして衆生は寿者である。經に「道法自然」（『道德經』二十五章）とあり、道法は非空にして空である。

これが長生の回答であり、道と釈を対比させて法と戒を解説しているが、なぜそのような解説になるのかは明瞭でない。いわば長生の託宣であって、對話にはならない。どの項目もこの調子で対比と分類に終始し、それを『道德經』（稀に『陰符經』）の言葉でしめくくる体裁をとる。そして、最後に述べた言葉（「問法」でいえば「空」）から、次の問が展開するのである。かくて、この資料から長生の<sup>な</sup>まの思考活動を読みとることは困難であり、長生が提出した結論を検討できるだけである。ここでも、ごく簡単にその検討をすることにしよう。

まず長生流の分類について述べると、たとえば第二の「問空」において、「空」に非空、頑空、真空、色空、世空、皆空、道空、性空、沈空、昇空の十種が提出され、これに『道德經』五十章の「出生入死、生之徒十有三、死之徒十有三」が結びつけられ、「その空を悟れば知である」として次の「問知」につなげられる。それぞれの空は「賢者は真空を守る」のような短文の羅列で、したがって長生の回答から聴者なり読者なりが空について理解を深めることは、ほとんど不可能である。こうした分類の方法をとるものは随所にあり、「天道罪福論」で認められたのと同質の執拗、単調、過多の印象がある。しかし、このような方法は道教の世界をよく知っている者、あるいは傾倒している者にとって、その世界を確認し納得する効果を持っていたはずで、しかも『道德經』という歴史もあり權威もあるものによって念を押すのであるから、宗教的な説得力は相当なものであったと思われる。世に出た形式が「語録」であって『道德經注』ではないということを考えれば、これは信徒や門弟を相手に一定期間に集中して行なった講説と思われ、

詩詞とおなじように口誦させた可能性もある。

第四の「問見」の回答にも、「見」の対象として虚無、慧光、亘容、恍惚、宝珠、霞彩、玄微、冲明、魂清、魄静の十項、第五の「問善」にも真善、清善、通善、明善、慈善、応善、徳善、道善、公善、常善の十項があげられ、以下、他にもこの形式がいくつかあり、長生がかなり形式に拘わる人物であったことが分かる。

対比の方法も全篇にみられ、たとえば第四十九の「問長」は、つぎのような構成である。

人の長について、道に順えば「真長」、情を忘れれば「命長」、善く妙を明らかにするなら「天長」、慧に通ずれば「理長」である。「真長」なら「虚無」の体に達し、「命長」なら「光円」を宝とし、「天長」なら「祥煙」がたおやか裏であり、「理長」なら「自然」が通ずる。「虚無」を明らかにすれば「道全」、「光円」を明らかにすれば「命全」、「祥煙」を明らかにすれば「神全」、「自然」を明らかにすれば「徳全」である。『道德経』に「天長地久」(七章)とある。天の長に順えば短がなくなる。

右の答えは順道↓真長↓虚無↓道全、忘情↓命長↓光円↓命全、善妙↓天長↓祥煙↓神全、通慧↓理長↓自然↓徳全の四連鎖式を組み合わせたものであり、四項の間に何らかの対比があると思われるが、はっきりしない。しかし、こうした例はむしろ少なく、多くのものは単純な対比の構造を持っている。第五十六の「問貪」について、その答えの構造はつぎのようである。

貪欲↓喪命  
貪財↓喪身  
愚  
濁↓貪世↓違道

泯欲↓全命

賢 悟者先苦後甘

絶財↓全身

清↓忘世↓達道

明らかにまつたくの機械的対比であつて、その間に思考が働く余地はない。長生は、八十項目にわたつてこのように形式的な問答を展開して一種独特の世界を提示したのである。では、内容についてはどうであらうか。

全体の思想を要約すれば、天と人とは相關するものであり、天は人に生命を与えると同時に人の心身の活動に対して禍福の裁定を下す。世俗の世界はすべて偽で濁、それゆえ世俗に心を置くことなく、天にのつとつて真にして清でなければならぬ、というもので、これはむろん長生の文章に一貫して認められるものである。

本資料の若干の特色を示せば、道氣と性命とを対比させた箇所がある。第二十四「問実」の回答に、「実」は道、性ともであり、道の実は天地より先に生まれて常存し不朽なるもの、性の実は万物の外に生まれて常存して不朽なるものである。道の実を明らかにすれば陰陽が万物を生ずることが把握でき、性の実を明らかにすれば万化に通ずる枢要があることが分かる。道が虚ならば氣が実、性が虚ならば命が実である——とある。

これは天地の道と人の性、天地の氣と人の命が対応することをいっている。道と性は「虚」たり得るものであるから、物質的存在ではなく、天地や万物から独立した原理ともいふべきものである。これに対して氣や命は道や性の実として、なにか物質性を感じさせる。長生がそのことを明言しているわけではないが、成仙を身外の身と考えているところからいへば、性を抽象的な原理（精神的原理）のようなものと理解したほうが分かりやすい。

性と命の関係については第六十六の「問円」でも触れている。月の晦朔に対比して命を考え、人の命光は十五で「円」となり、「八八」で卦が尽きて命がなくなる、情がなければ「命住」、物がなければ「性通」である、という。

性が物から独立したもの、命が情を生みだす身体と関連して考えられていることが分かるが、両者の関係は明瞭ではない。

命光が十五で「円」となる、については、受胎から数えて十六歳だという附注がある。十六とは二八で二箇の八両すなわち一斤のことであり、陰陽が平衡することである。八八は六十四で、卦数のことである。内丹術では一般には火候のことを表わすが、ここでは陽が減少し陰が増加する段階のことで、六十四歳で陽が尽きることを指すのであろう。下文に「真火が降り、九転が完成して形は不朽だ」とあって、ここでは身体内の陰陽の気の運行を述べている点に特色がある。

体内の気の運行といっても色身を修することではなく、真を修することであり（第五十五「問忘」、第十七「問清」には、天清↓通天象↓降氣沖和↓氣神相結、心清↓顯亘靈↓与道同体↓真形不朽、淵清↓明二八↓靈泉無漏↓皓月光円、という三連鎖式の組み合わせが見られる。この場合、天清は道、心清は性、淵清は命にかかわると思われるが、いずれも体内の気の運行と道土としての悟り（道の完成）を言っている点に特色がある。

さらに二、三の事柄を付け加えると、三教調和の考え方は、ここでは外貌が愚者のようであった顔回、釈迦、純陽に代表されて示されている（第八「問愚」。顔回は清貧で一簞一瓢、釈迦は乞食して一飯七家、純陽は無為で鶉居鷄食した点が「外愚」で「内に道を抱いた」ことだという。この三者の挙げ方は長生独特である。

第四十一「問著」で「不著著」について「出塵して身を万物の有から遠ざける」と説明するが、その「身は蓮のようで、身は塵にありながら性に塵が無いのが真を了したことだ」とするあたり、曾て洛陽の市街に隠れた修行体験を思わせる。

第四十三「問人」において、人に善行があれば中華に生まれて道を修め、洪禧があれば中国に生まれて徳を積む、としている点に中華思想が看取される。この中華、中国は丹田の象徴ではなく、字義どおりのものであるが、長生がそのように中華を評価した心情はよく分からない。

第七十七「問近」で、孝行して父母の恩に報い、家が善ならば許君や龐士のようだと述べているが、「家善」とは家族中が悟るの意味であろう。許君・龐士とは東晋の許遜（許真君）と唐の龐蘊（龐居士）のことで、許遜には一家中、家もろとも昇天したという伝説があり、龐蘊の一家はみな悟って成仏したと伝えられる。許・龐については丹陽も言及しているが、<sup>(42)</sup>長生は次節で触れるようにしばしば引き合いに出している。ちなみに「鶉居穀食」も丹陽の言葉にあるが、<sup>(43)</sup>これも長生はかなり多用している。前者はひろく流布していた伝説であり、後者は一般的な表現であるから、長生がこれらを丹陽から教えられたとはかぎらないけれども、しかし同一の表現を多用することは長生の特色である。単調で形式的な長文が多いことと通ずるといえよう。

# (五) 『仙樂集』その他

『仙樂集』については、巻一所収の「天道罪福論」をすでに検討した。ここでは、巻二の「頌」や「勸」を中心に詩詞を瞥見し、あわせて『真仙直指語録』（藏苑冊）上に収録されている「長生劉真人語録」を分析する。

巻二には百六十首の五言絶句のあとに「頌」が続く。長生の文章によく見られるように、これも対比的で形式的なものである。まず「順真」と「違道」の対比があり、「順真」には生、平、柔、福、安、昇、鍊鉛、神靈が、「違道」には死、濁、剛、禍、病、墮、喪命、氣逆が、それぞれ内容となる。ついで、魂魄散↓鬼、陰陽聚↓仙の対比以下、

功と行、達と通、居山と混塵の心がまえの対比があげられる。これらは鬼と仙の対比以外はプラスの対概念である。最後に、隠洞天―遊京華という状況の対比以下、孤雲―野鶴という性―形の対比、自然の道と道士の日常がどちらも滞りがなく、「殻を蛻して真に帰し、三界を出離す。永く輪廻を免れ、去来することなし」と結ばれる。比較的短い「頌」であるが、卑近な状況の対比から始まって修養の問題に移り、最後に得道の境涯を述べて、長生の文章としては構成をよく考えたものだといえよう。内容的にはとりたてて指摘することはない。

卷二の末に「十二勸」と「十勸」があり、信徒に道についての心がまえを教えている。「十二勸」は信、真、謙、通、常、定、是、善をもち、真愛、忘情、氣清、全道であれと勸めている。ほとんど世俗の道徳に近い。

「十勸」はつぎのような内容である。<sup>(4)</sup>

- ① みずから罪過を犯したことを知りながら、人を慢って意を縦にして改めないのはいけない。
- ② みずから失錯しながら、人の指摘を怒り常に人を怨む、という氣持をおこしてはいけない。
- ③ 自分の正しさを衒って、あからさまに常に他人の非を言ってはいけない。
- ④ 自分を高くして誇り、いっさいの入道の人を低くみてはいけない。
- ⑤ 經典に依らないで道理を説いてはいけない。
- ⑥ 始めはきちんとしても終わりがだらしなのはいけない。氣持は常に初めて会ったときのようにしていなければならぬ。

- ⑦ いつも世の人々の短所を説いてはいけない。いつも世の人々の長所だけを述べなければならない。
- ⑧ 仕事をするのに不平等ではないけない。利益を与えてくれる者を好み、与えてくれない者を嫌ってはいけない。

⑨ 定慧だけではない。修行の人は静を守らなければならない。理に達せず、悟りを開かないうちは書を読んではいけない。

⑩ 有無に執著してはいけない。住行坐臥に心は常に清静でなければならない。

読みにくいところがあるので、原文あるいは句読にまちがいがあるかもしれないが、およそ①から⑧までは世俗倫理としても通用するものであろう。長生の教団に初歩的な戒律ができていたことが分かるが、とくに⑤と⑨が注目される。重陽や丹陽は經典を基本的には斥ける姿勢をとっていたが、⑤はそれに反する。丹陽は重陽よりは經典に対して緩やかな態度であったが、長生はそれを飛躍させて經典の価値を積極的に打ち出した。『陰符経』その他に附注しているのもその態度の現われである。おそらく、長生には四哲のうちの他の三人よりも重陽の影響が薄く、若年のころからの慕道の性向がそうした態度をとらせたのであろう。

つぎに『仙楽集』にみえる詩詞の内容について簡単に触れておこう。卷一「白蓮花」詞には二十九首が収められているが、そのうちの十首に「古今許龐家去、也応都免輪廻苦」という定形句があつて、許遜・龐蕴について言及している。さらに卷三「四言頌」の「述懷」第三、四首、そのほかに四首、卷四の「上平西」第二首、「満庭芳」第二、三、八首、「酹江月」第四首、「水龍吟」、「惜黄花」第三首、卷五「五言絶句頌」第一百十八首にも登場し、詩詞の全体量を考えれば、これははなはだ頻繁なことである。「満庭芳」の第三首には「許真君全家拔宅昇天、龐居士全家坐脱立亡去」と割注があり、詞中の「全家拔宅」を説明している。割注が自注かどうか不明であるが、長生はよほど許・龐に傾倒しており、ここまで彼らを理想化した全真道士は他にない。

詩詞中に登場する歴史上の人物としては、他に潘岳、李白、范蠡、陶淵明、石崇などがあるだけで、おおむね重陽



や丹陽の範囲内にある。道教関係では老子が頻出するのは当然であるが、鍾離權や呂洞賓はそれほどでもない。重陽や丹陽の道統意識とはやや違った傾向があったといえるかもしれない。三教関係では孔子、釈迦、達磨などがおり、『崔公入藥鏡』に言及があるのは内丹を研究した証拠である。また、老荘の書物を楽しむという主旨の表現も散見し、信徒にも「莊老を閑看する」(巻三・十三表)ことを勧めている点は、經典尊重と並んで、重陽、丹陽には見られない長生の特色である。実際には重陽も丹陽も『莊子』を読み、とくに丹陽は悟道の境地を『莊子』の表現を借りて表わすことが多いが、人に勧めたりはしていない。

「長生劉真人語録」は、前節で検討したものと違って「語録」の形態がやや明瞭である。すなわち、これが信徒門弟に説教したものである痕跡が部分的に残っている。内容はだいたい六部分に分かれ、つぎのようである。

① 一物について通ずると一物の殻をぬけ出られる。万物に通ずると万物の殻からぬけ出られ、虚無の道を証し得る。もし通じなければ、身は無為にいても、心は頑空というのだ。すでに聖賢となれば、天下の誰もが知っている。<sup>(45)</sup>

② 太上は言った、「乞食できる者は、吾が弟子である」と。「乞」には、人の恩を蒙るから自分の身が自分の思うようにはならない、という益がある。天地開けてこのかた、さかしらな人ばかりで心の妄動がやむときがないが、業が消えつくして功が現われるのだ。気が和らぎ神が定まったと自覚して自然の真常の道が得られるのだ。<sup>(46)</sup>

③ もし一巻の経に従って修行したとしても、それでもうよいということにはならないから、心が無礙であろうとすれば、千経万論にすべて通じなければならないが、しかし心に執著してはならず、神明がすべてを照破するの

である。<sup>(47)</sup>

④ 道は影も形もないものであるが、往々にして人は始まりも終わりもあるのではないかと疑う。もし心に私がなく、常に清静に徹底していれば、それが道人なのである。ただ清静の二文字だけがすべてを包含しているのだ。<sup>(48)</sup>

⑤ 太上は云った、「わたしでさえ自分の頭が白いのであるから、誰が身体が完全なままであり得ようか」と。万物の数に数えられるものは、どうして仮りの身に依存しながら長生不死を求められよう。形があれば壊れ、形がなければ壊れない。心に悟れば邪欲は生まれず、心が慧ならば常に照らして不滅である。元神がおのずから見わ<sup>あ</sup>れて、そうしてはじめて命を長く保てるのだ。天地人が虚無となって一に帰着すれば、自然の功が<sup>(49)</sup>できあがる。

⑥ また「修行者は、神と氣とが出合ったならば、神仙になれる」と述べ、聴衆に「どうしたら神と氣が出合えるか」と質問した。人々はそれぞれ異端の説を述べ、誰も正解でできなかった。そこで師が言った。万法を明らかにしようと思えば、万物の殻をぬけ出て一分の塵がなくなると一分の道が明らかになる。十分の塵がなくなると十分の道が明らかになる。もし塵心がすっかりなくなれば、性を全うでき、色心がすっかりなくなれば、命を全うでき、無明心がなくなれば、沖和を保つことができる。修行者は、十二時中、ただ自分の過誤を捜すようにすれば、はじめて神と氣を安らかにできる。神氣が安らかなのが真功である。他人の非を見ないのが真行である。天地が長久であるように、入道して永年精氣を養っていき、精氣が盛んになれば神は氣を思い、氣は神を思つて、自然に神と氣が出合える。水と土をまぜて泥とし、器物をこしらえるようなものである。もし、まだ真火で焼かないうちに土にまた水が加われば、また泥になってしまう。もし真火で焼き上げれば、器となって壊れないのだ。瓦のようなものでも火で焼けば千年も壊れないのだから、まして性命が至宝を煉成するならば、なおさらだ、と。<sup>(50)</sup>

右の語録において、あるいは①②は連続し、⑥の別伝である可能性がある。また、⑥の冒頭の「又」を重視すれば、①②⑤が一連の説教で、都合二種の説教である可能性もある。

ともあれ、少なくとも①は⑥の一部分と重複し、一塵を除けばその分だけ道を明らかにできるとするのは、いかにも長生の発想である。②は乞食の必要性を述べている。叛骨心猿を消尽するための効用も意識されており、洛陽の繁華街での乞食行がこの発言の根底となっているであろう。ここの「神氣」は⑥で問題にしている「神氣相見」段階の「神氣」よりも一般的なものであり、「神氣内安」の「神氣」のことである。

③は經典と修行との関係を論じている。重陽や丹陽と違って、長生は經典に依存する度合いが大きい。「執著心」は「執著する心」かもしれないが、文脈上、心に執著すること、すなわち經典を頭で理解しようとする、と解した。④において、「道」は「修道」の際の「道」のことであろう。したがって「有始有終」とは修道に段階もしくは形式があり、その階段を踏めば自然に「道」が完成して「道人」になる、と考えることであろう。長生は発想自体に多分に形式的な面を持っているが、さすがに「道」そのものをも形式のなかに取りこむことはしなかったのである。

⑤は、有形に対する無形の立場で命を保つことを述べている。無形の立場とは、邪欲の働く世俗を超越し、三才を虚無とする精神世界のようなものである。

⑥は「神氣相見」を論じてもともと道教教である。塵心、色心、無明心とはよく分からないが、文脈上、三界に対応するようなものではなく、塵心とは世俗のことにかかずらう心、色心とは身体上のこと、無明心とは思考の働きに關するもの、と解される。色とは酒色財氣の色であろう。真功真行は重陽も丹陽も説くことであるが、たとえば『全真集』卷十所収の「玉花社疏」に引く晋真人の説明<sup>(註)</sup>にくらべて、長生の説明はまことに卑小である。性命と水土につ

いては、二(四)で検討した語録の第六十六「問円」でも言及され、「命が性に通ずれば水が土を見たようなものである。性が命に通ずれば土が水を見たようなものである。常によく通ずれば真火が降り、九転が完成して形は不朽である」とある。性が土、命が水に配当されて、この語録と同様に、水土が泥となり、焼かれて器物となることによつて修行を喻えているのであろうが、「問円」の説明だけでは何のことか分からない。両語録を合わせれば、神気が性命であり、土と水で喻えていることが分かる。長生もまた性を重視する重陽、丹陽の教えを守っていたわけである。長生の文章は形式的傾向が強く、長生のなまの思考や発言が感じられないものが大部分であるが、本語録は珍しく臨場感のあるもので、貴重な資料といえるであらう。

## むすび

本稿は劉長生の生涯と教説について概略を述べたものである。生涯については、資料の不足もあって、十分なことは分らない。四哲のなかでは入道の機縁は比較的単調であり、重陽の薫陶期間も短かったので、全真道士としてどれほどの自覚を持っていたかは疑問である。丹陽のもとで道士としての修練を積んだが、若年による未熟さが、丹陽の詩詞や長生にまつわる伝説には見える。長生が一人前の道士となったのは洛陽における修行を通してであったが、その後に萊州で丹陽に再会したときの言動をみても、長生の覚悟がなお不足していたことが分かる。しかし萊州武官荘でさらに修行を積み、全真教の主教として重責を担っていく過程で、名実ともに四哲の一人として数えられるにふさわしい道士になっていったと思われる。



踏まえた呼称で、九すなわち陽の重なりを意味する。その心は純陽とおなじように純粹な陽の意味であり、重陽節がチヨウウセツならば重陽もチヨウウとすべきである。

2 拙稿「馬丹陽の出家をめぐる」、秋月観映編『道教と宗教文化』、一九八七年三月、平河出版社、所収。

拙稿「馬丹陽の布教活動をめぐる」、『東洋文化研究所紀要』第一〇四冊、一九八七年十一月、所載。

3 拙稿「譚長真の生涯と思想」、『東洋文化研究所紀要』第一〇八冊、一九八九年二月、所載。

4 夷門のことは『金蓮』のほか、譚長真『水雲集』（藏七六冊）の范樸序（一一八七年一月十五日付）に見える。岳台坊のことは姫志真『重陽祖師開道碑』（『道家金石略』五八七頁）に見える。

5 注2所掲拙稿二篇参照。

6 丘劉譚馬、幸遇風仙親教化。一別山東、雲水秦川興不窮。清貧快樂、自在逍遙無倣作。清淨門庭、闡出家風合聖經。

7 丘仙通密、隱跡磻溪人不識。通妙劉仙、永住終南屏万緣。譚仙通正、志在清貧修大定。三髻山侗、願処環堵也放慵。

8 譚仙通正、悟徹長真修玉性。馬鈺山侗、豁豁洋洋似害風。劉仙通妙、把握長生真了了。通密丘仙、修養長春不夜天。

9 処端通正、道号長真真上認。自在逍遙、城砦岩前汲水瓢。処玄通妙、道号長生真了了。慎勿先婦、且伴長春丘処機。

10 先生独遁跡於洛京。鍊性於塵埃混合之中、養素於市廛雜沓之叢。管絃不足以滑其和、花柳不足以撓其精。心灰為之益寒、形

本為之不春。人饋則食、不饋則殊無溫容。人間則對之以手、不問則終日純純。定力円満、天光發明。

11 李志常『長春真人西遊記』（藏二〇六冊）、『統編』長春伝など、参照。

12 ころろみに、この前後数年間の金朝の道教対策と、各地に頻発した反乱について『金史』卷七、卷八からその記事を拾ってみると、

大定十八年（一一七八）三月、民間で寺觀を創興することを禁止した。

同、獻州の人殷小二が反乱し、誅に伏した。

大定十九年（一一七九）七月、密州の民許通らが反乱し、誅に伏した。

同・八月、済南の民劉溪忠が反乱し、誅に伏した。

大定二十年（一一八〇）九月、蒲速碗の羣牧老忽が反乱し、誅に伏した。

大定二十一年（一一八一）三月、遼州の民朱忠らが不穩の言説を流し、誅に伏した。

同・閏月、恩州の民鄒明らが不穩の言説を流し、誅に伏した。

などが見あたる。反乱や「乱言」は、むしろ宗教教団と直接の関係はないが、志を同じくする多数の人間が一定の組織に編入されることは、政府にとって歓迎すべき事態でないことも明白であろう。このころ全真教はまだ朝廷と関係をもっておらず、また、十九年（一一七九）に世宗みずから臣下に「多くの人々は仏教や道教を信じて幸福を願っている。わたしも若いころ宗教に迷ったが、その後その非を悟った。そもそも上天が君を立て、民を統治させるのであるから、楽しみに耽って怠け心をだし、僥倖によって福を願っても難しかろう。もし下民をよく慈しみ養えば、天の心にもかない、かならず福が報われるのだ」と語っているところから考えても、全真教団の発展は、当面、阻止される運命にあった。

なお、本稿で述べた大定二十年の観額のない観の廃止は、大定十八年の政令を実行した例であろう。

13 注2所掲拙稿第二論文、二三四～五頁。

14 注3所掲拙稿、六九頁。

15 『終南山祖庭仙真内伝』（藏六四冊）卷下「清和真人」伝。

16 『重陽全真集』（藏七五～四冊）范懣序。

17 華山玉泉院に宋代の石刻臥像がある陳搏は「睡仙」として有名であるが、長生も「睡仙」だとする伝説があったらしい。伝記諸資料には、それを明証する記事はないが、長生の弟子の宋徳方が開鑿した寒同山の長生洞には長生の石刻臥像がある。明章二年の事件は、あるいはその伝説の淵源の一つになったものかもしれない。

18 任繼愈主編『中國道教史』、一九九〇年六月、上海人民出版社、は金元全真教の發展を四段階に分け、第一段階を一一五九年から八七年、第二段階を一一八七年から一二一九年としている（第十四章、金元全真道、五二〇頁以下）。

19 『終南山祖庭仙真內伝』卷下「披雲真人」伝。

20 道釈与儒門、真通法海、易妙陰陽外、自然解。金剛至理、頓覺無爭浪愛。五千玄言奥、夷明大。微光運転、結成雲蓋、霞輝常照体、何星礙。松枯石爛、亘貌古今真在。他年功行滿、昇仙界。（「は逗点を表わす。以下同様」）

21 聖觀号天長、星冠雲服、養成金玉体、真無朽。信知大道、自然無中明有。世華心不恋、遊王屋。外貧保命、隱真居陋、亘初無相貌、勝豐厚。桑田海變、這箇無形堅久。暗祝吾皇德、齊天寿。

22 泰和二年、主濱州離。正月中旬、小雪初霽。古城壕水復水、上現瓊葩玉樹、不啻千數、若珊瑚之狀尤多。又杏花約及二千、其小枝橫臥者、殆不可勝計。觀之者、皆曰「常人至誠、尚可動天地感鬼神、況有道之士乎。有此感應也、宜矣。」

23 「水火」は内丹術では一般に腎臓と心臓を指すが、ここでは漠然と身体内の臓器を指していると思われる。「水火に沈める」とは臓器の働きをいうのであろう。

24 「丁翁」は丁老、丁公などとも呼ばれ、内丹術では火を表わし、元神を喻えている。ここでは、元神（陽）が命（北海の烏龜、すなわち陰）と合一して身体となることをいっている。

25 一般に内丹術では、心臓は火で離、腎臓は水で坎とし、火が水の下、水が火の上にあつてこそ湯を沸かすことができるという事象にたとえて、離卦（三）中の陰爻と坎卦（三）中の陽爻を交換することを目指す。具体的には、心と腎にある氣を昇降して融合することをイメージし、それを五行の顛倒とよぶ。

26 腎海の金龜について、金は西や肺臓を表わし、龜は北や水、腎を表わすが、内丹術では金水が合致すると称して腎の氣が動き始めることをいう。ここでは、性が世俗の欲望つまり外陰に執著すると、腎の精氣が失われることをいうのであろう。重楼は内丹術では喉を指し、一般に口中の津液のことを玉液と称する。汞は元精あるいは元神を指すが、玉汞の玉は金に対立する



ものであるから玉汞はつまり元神、すなわち腎に対して心中にある初動の氣であろう。ここでは、それが腎の氣と融合してできた口中の津液を玉汞といったものと思われる。

27 三要には諸説があるが、長生は天・地・道とこの三者それぞれの三つの主要な事物を考えているようである。道と妙とは天地に対する「人」を指すと思われる。

28 鉛汞とは内丹術では元神と元氣、つまり心腎の初動の氣を指すが、こここの「鉛汞真」とは、次注に述べる三靈のことであろう。三光は日月星の光、三宝は珠玉金、三靈は精氣神のことであろう。

30 原文は「火生人之心日常解処不万變之惡」であるが、「不」では通じない。「有」あるいは「為」の譌字として解した。

31 二八とは二つの八両つまり半斤ということ、合わせて一斤十六両になる。意味するところは元神で、ここでは腎の精氣のことであろう。真金とは真鉛のことであろう。腎の精氣は陰であるから鉛と称する。真というのは水つまり坎卦でいえばその中央の陽爻のことで、この陽があるから腎の氣は上昇して心の火（陽）と交わるのである。

32 六十四卦は内丹術では火候つまり体内に氣をめぐらす修練の段階をいう。

33 賢達に対して至私から至公へとは、天は言葉に出して知らせるわけではないが結局賢達が天堂に昇れるように計らうこと、匹夫に対して至公から至私へとは、天は匹夫をも生む点において至公であるが地獄に落とす報いがあることを知らせないのは至私だ、ということであろう。

34 赤鳳は内丹術では一般に元神を指す。陽や心、上丹田に結びつく。九霄は九天のことであろうが、九天は内丹術では頭頂のことであるから、赤鳳が九霄に入るとは陽の氣が体内を運行して頭頂に達することをいうのであろう。

35 龜は内丹術では一般に腎間の動氣を指す。腎や坎卦、北に結びつく。乾は陽の極のことであろうから、烏龜が乾を吸うとは、腎と心の氣が交わることであろう。龜と鳳は食氣と咽津を象徵するのが一般的であるが、ここでは「在氣」の説解でもあるから、心と腎の氣（陽と陰の氣、清と濁の氣、あるいは元神と元氣）が交わって体内を運行することをいうのであろう。

36 北海は内丹術では一般に丹田のことである。腎の陰気が丹田で心の陽氣と交わって、輕清の元氣となり、その氣に乗じて元神が上丹田にめぐる、ということであろう。

37 三寸は内丹術では三丹田を指す。長生は必ずしも三と考えていたわけではなく、『黃庭内景玉經』靈台章に「中央三輝、聚而成形、陽逢壬癸、陰過丙丁」と附注している。

38 「文俊顯万華、理明顯万通、哲極闡万化」の文意がはっきりしない。文は天地や事物のさまざまな現象、およびそれに対応した修行段階の現象、理はそれらの構造の同一性、哲は右のことからを悟ること、であろうか。

39 この經の内容などについては、麦谷邦夫『黃庭内景經』試論、『東洋文化』六二、一九八二年三月、参照。

40 馬丹陽『洞玄金玉集』（藏六九〇六冊）卷一・一表、七言絶句。

41 原文は「仏老文宣」であるが「宣」は「宜」の誤りと解した。

42 『洞玄金玉集』卷九・一表「贈蓬瀛散人」に「効願公許氏、全家頓悟同登」とある。

43 『洞玄金玉集』卷九・十一表「贈門人」に「難迷溺、鶉居穀食、念忘情息」とある。

44 一勸、不得自知是愆過、慢人縦意不改。二勸、不得自失錯、嗔人道著、常起念怨人。三勸、不得自銜己是、直言常說他人非。四勸、不得誇自高、減一切入道之人。五勸、不得不依經教說道理。六勸、不得有始無終、心意常要似初相見之時。七勸、不得常說他世人之短。只要常言世世之美処。八勸、不得作事不平等。不得見有施利者愛、見無施利者嫌。九勸、不得定慧者。修行之人、不得不守靜。未達理、未開悟、不得不看書。十勸、不得執著有無。不得不悟住行坐臥心常清靜。

45 心上通一物、出一物穀、通得万物、出得万物穀、証得虛無之道。若不通、便処無為、心名頑空。既為聖賢、天下皆知。文中、「穀」は「穀」の意味に解した。既為以下の文意は不詳。あるいは「皆知」は次の「太上」にかかるものか。

46 太上云、能乞食者、是吾弟子。乞中有益、蒙人恩、身不自在。曠劫以來、販骨如山、心猿未曾暫歇、業消尽、見功也。自覺氣和神定、得自然真常之道也。文中、「販」は「叛」の意味に解した。太上云々の典故は不詳である。

47 若執一卷經做修行、然是亦未是、欲要心無碍、千經万論都要通、却不得執著心、神明都照破也。

48 道為無形無影、往往人多疑有始有終。若心上無私、常清靜做徹、便是道人。只清靜兩字都包了。

49 太上云、吾尚自頭白、誰能形完全身。属万物之數、怎生憑假身要長生不死。有形則有壞、無形則無壞。心悟則邪欲不生、心慧則常照不滅。元神自見、然後保命長存。三才虛無、混而歸一、成自然之功。太上云々の典拠は不詳である。

50 又云、修行人、如神氣相見、得做神仙。問衆曰、如何得神氣相見。衆人各說異端、俱不達理。師言、要明万法、出得万物之殼、一分塵尽則明一分道。十分塵尽則明十分道。如塵心絶尽、則可全於性。色心絶尽、則可全於命。無明心尽、則可保於沖和。修行人、十二時中、只要内搜已過、方可得神氣内安。神氣安則為真功。不見他人非則為真行。天長地久、入道多年、内養精氣、精氣盛、則神思氣、氣思神。自然神氣相見。如水土和為泥、造成器物。若未經真火煨煉、土再見水、復化為泥也。如經真火煨煉、成器則不壞矣。如磚瓦曾經火煉、亦可千年不壞。何況性命煉成至宝。文中、「殼」は「殻」の意味に解した。

51 若要真功者、須是澄心定意、打疊神情、無動無作、真清真淨、抱元守一、存神固氣、乃是真功也。若要真行者、須是修仁蘊德、濟貧拔苦、見人患難常行拯救之心、或化誘善人入道修行、所行之事、先人後己、与万物無私、乃真行也。文中、冒頭は「苦」に作るが、『晋真人語録』(藏三六冊)により「若」に改めた。

一九九一・七・二八稿